

上田市合併 10 周年記念事業

ふるさと上田人物伝

上田市教育委員会

上田市合併 10 周年記念事業

ふるさと上田人物伝

上田市教育委員会

序

私たちの郷土が、上田市・丸子町・真田町・武石村の合併により新生上田市として発足してから10周年を迎えました。

この度、合併10周年記念事業のひとつとして「ふるさと上田人物伝」を作成いたしました。この冊子では、江戸時代末期の幕末から現代に至るまでの故人の中から、上田出身あるいは上田地域で活躍し、地域振興や専門の分野で優れた業績を残した人物50人（49組）を選んで紹介しています。

上田の先人・偉人に挙げられる人物は、本冊子で扱った人々の他にも、古代から現代に至るまでまだまだ大勢います。上田市では、かねてより郷土の文化・歴史・偉人の業績などを知る機会の創出に努めてきましたが、今後も先人・偉人顕彰の取り組みを進めてまいります。

冊子の刊行にあわせて、「広報うえだ」等で関連する資料や情報などのご提供を呼び掛けたところ、多くの皆様からご連絡をいただきました。お寄せいただきました情報は、今後の先人・偉人の顕彰活動に役立ててまいります。

結びになりますが、本冊子の作成にあたり、編集執筆委員をはじめ、玉稿をお寄せいただきました皆様に衷心より御礼を申し上げます。

平成29年3月31日

上田市教育委員会
教育長 小林一雄

例　　言

- 1 この冊子は、上田市合併 10 周年記念事業として作成しました。
- 2 この冊子では、幕末から現代までの「故人」で、現在の上田市域出身あるいは上田地域で活躍した人物の中から、地域振興や専門の分野で著しい業績を残した人物 50 人（49 組）を選び、その生涯と業績の概要を紹介しました。
- 3 この冊子に掲載した人物は、本書作成のために組織した編集執筆委員会（巻末参照）の合議により選出しました。
- 4 この冊子の執筆は、編集執筆委員のほか、多くの皆様に依頼し、一部を上田市立美術館、同博物館、及び文化振興課職員が行い、編集は文化振興課職員が行いました。
- 5 執筆分担は、目次に記載しました。

凡　　例

- 1 人物は氏名の五十音順で掲載し、文中における人物への敬称は省略しました。
- 2 明治初期までの生没年については、和暦と西暦に差があるため、表記が異なる場合があります（小河滋次郎、黒沢鷹次郎の生年）。
- 3 年齢は、当時の記録等にもとづき、数え年で記しているものが多くありますが、記録を尊重して修正していません。

うえだじまのういしょう

表紙写真　上田市指定文化財「上田縞能衣裳」（部分・上田市立博物館所蔵）

目 次

| | | | |
|----|----------|-------|----|
| 1 | 赤松小三郎 | 林 和男 | 1 |
| 2 | 飯島保作（花月） | 土屋郁子 | 3 |
| 3 | 石井鶴三 | 市立美術館 | 5 |
| 4 | 伊藤松宇 | 矢羽勝幸 | 7 |
| 5 | 上野尚志 | 児玉卓文 | 9 |
| 6 | 兎東武雄 | 宮坂公子 | 11 |
| 7 | 小河滋次郎 | 横澤 瑛 | 13 |
| 8 | 笠原善吉 | 文化振興課 | 15 |
| 9 | 金井 正 | 小平千文 | 17 |
| 10 | 金子ふじ | 中澤優子 | 19 |
| 11 | 金子行徳 | 阿部 勇 | 21 |
| 12 | 工藤善助 | 阿部 勇 | 23 |
| 13 | 久米正雄 | 土屋郁子 | 25 |
| 14 | 倉田白羊 | 米津福祐 | 27 |
| 15 | 倉田文作 | 市立博物館 | 29 |
| 16 | 黒澤鷹次郎 | 小平千文 | 31 |
| 17 | 河内山 寅 | 宮島かつ子 | 33 |
| 18 | 小島大治郎 | 桂木 恵 | 35 |
| 19 | 小菅武夫 | 宮本達郎 | 37 |
| 20 | 小山真夫 | 児玉卓文 | 39 |
| 21 | 佐藤八郎右衛門 | 市立博物館 | 41 |
| 22 | 柴崎高陽 | 川上 元 | 43 |
| 23 | 柴崎虎五郎 | 阿部 勇 | 45 |
| 24 | 渋沢孝輔 | 宮沢 肇 | 47 |
| 25 | 下村亀三郎 | 阿部 勇 | 49 |

| | | | |
|----|------------|-----------|----|
| 26 | 真保正子 | 杉山洋子 | 51 |
| 27 | 高桑勝雄 | 川上 元 | 53 |
| 28 | 滝澤助右衛門 | 文化振興課 | 55 |
| 29 | 中村直人 | 市立美術館 | 57 |
| 30 | 中村 實 | 市立美術館 | 59 |
| 31 | 成沢玲川 | 川上 元 | 61 |
| 32 | 新田 潤 | 土屋郁子 | 63 |
| 33 | 八田たつよ | 山㟢庸子 | 65 |
| 34 | 花岡みよし | 中澤優子 | 67 |
| 35 | 林 倭衛 | 市立美術館 | 69 |
| 36 | ハリー・K・シゲタ | 市立美術館 | 71 |
| 37 | 半田孝海 | 富田隆順 | 73 |
| 38 | 半田孝淳 | 富田隆順 | 75 |
| 39 | 藤澤直枝 | 尾崎行也 | 77 |
| 40 | 藤本善右衛門（縄葛） | 阿部 勇 | 79 |
| 41 | 正木直太郎 | 阿部 勇 | 81 |
| 42 | 松平忠禮・忠厚 | 阿部 勇 | 83 |
| 43 | 松平忠優（忠固） | 阿部 勇 | 85 |
| 44 | 松山原造 | （公財）松山記念館 | 87 |
| 45 | 丸山千代子 | 宮島満里子 | 89 |
| 46 | 三吉米熊 | 阿部 勇 | 91 |
| 47 | 山極勝三郎 | 神田愛子 | 93 |
| 48 | 山本 鼎 | 市立美術館 | 95 |
| 49 | 依田郁子 | 杉山洋子 | 97 |
| | 関連施設・参考文献 | | 99 |

赤松小三郎 (あかまつ こさぶろう)

幕末の先覚者、議会政治を提唱
天保 2 年～慶応 3 年 (1831～1867)



赤松小三郎は、上田藩士芦田勘兵衛の次男として生まれました。安政元年（1854）に同藩士赤松弘の養子となり、後年に通称を清次郎から小三郎に改名しています。

江戸、長崎で世界を知る

小三郎は幼少のころから和算（わさん）（算数）に興味を持ち、和算家で叔父の植村重遠（うえむらしげとお）に学びました。算数に没頭するあまり、「算盤を片手に町人となる気か」と言われたといいます。

嘉永元年（1848）、18歳のときに江戸へ出て、和算家の内田弥太郎（うちだやたろう）の塾で学びました。小三郎自筆の計算書や写本等が残されていますが、蘭学、測量、天文、暦学等の諸学にも熱中していた様子がうかがわれます。同年には下曾根信敦（しもそねのがかつ）に西洋式砲術（かつかいじゅう）の教えを受けました。翌年に上田に帰った小三郎は、再び江戸に出て勝海舟（かつかいしゅう）の門下生となります。

海舟が安政 2 年（1855）に長崎海軍伝習所の一期生となり長崎に赴くと、小三郎も従い、オランダ人教師から当時の最先端の学問を学ぶとともに、オランダ語の原書を翻訳して出版しました。

長州征討（ちょうしゅうせいとう）が始まると上田藩も出兵し、江戸へ赴きます。この機会に小三郎は横浜に通って英國士官から英語や英國兵法を学びました。勉学の様子は、「同僚が寝入って室内が静まるようになると起きて、衣類で灯火（お火）を覆い、英書を夜更けまで読んだ」と伝わっています。

英國兵法に強い関心を抱いた小三郎は、『英國歩兵練法』を翻訳し、慶応 2 年（1866）に刊行しました。この翻訳本によって小三郎の名は広く知られるようになりました。翌年には薩摩藩の求めに応じて『重訂英國

歩兵練法』を、薩摩藩版本として刊行しました。

国政改革を志す

小三郎は慶応 2 年に京都で私塾を開きました。この塾では全国の藩士が学び、その後の日本の近代化のために活躍しました。また、薩摩藩に招かれて、その京都藩邸で英國式兵法等を教えていました。

國の前途を憂える小三郎は、幕府に幕政改革、上田藩主に藩政改革の意見書を提出しました。まつだいらしゅんがくさらに、翌年には徳川幕府と幕府の有力者であった前福井藩主松平春嶽まつだいらしゅんがくと雄藩である薩摩藩主の実父島津久光しまづひさみつに国政改革の意見書を提出しました。「天幕御合体、諸藩一和」てんばくごがったい しょはんいっわとして、上下二院制議会の創設、人材教育と学校の創設、人民の平等などの 7 項目について具体的な方策を述べています。

京都に散る

幕府は小三郎を開成所の教官として迎えようとしたが、上田藩はこれを断り、京都からの帰藩を命じました。やむなく上田に帰ろうとした小三郎は、その直前に門下生の薩摩藩士中村半次郎きりのとしあき（後の桐野利秋）等によって暗殺されました。数え年 37 歳でした。

小三郎は京都の金戒光明寺に葬らましたが、薩摩藩門下生によって慶応 3 年に建てられた墓碑は平成 23 年に新しい墓碑に建て替えられ、記念碑として上田に移されて、赤松小三郎記念館（上田城跡公園内）で公開されています。また、遺髪の墓（市指定史跡）が市内中央 6 丁目の月窓寺にあります。上田城跡公園内には門下生の東郷平八郎が揮毫した顕彰碑があり、市立博物館では、「赤松小三郎佩刀」はいとう（市指定文化財）等の小三郎関連の資料を収蔵、展示しています。



赤松小三郎佩刀（上田市立博物館所蔵）

飯島保作（花月）（いいじま ほさく/かげつ）

花月文庫を後世に残した実業家
文久3年～昭和6年（1863～1931）



飯島保作と「花月文庫」、蔵書8715冊の偉業

飯島保作の数ある業績のなかで、後に「花月文庫」と名付けられた数多くの蔵書を残したことは、特筆に値することです。保作は生涯をかけておびただしい数の貴重な古書（ことに江戸庶民文化）を収集しています。その貴重な史料が飯島家から上田市に譲られ、上田市立上田図書館に保管され、この史料により、多くの研究者によって地域の様々な歴史が明確に解明されていくことは喜ばしいことです。

この花月文庫の「花月」は飯島保作のペンネームです。「花月文庫」は「初めから後世に残すことを目的として収集された書物」で、今なお歴史や文学の研究には、大きな貢献をしています。

天皇陛下の給仕役に抜擢ばってき

飯島保作は、文久3年（1863）9月21日、父佐兵衛、母「やそ」の長男として横町に生まれました。明治5年（1873）8月、日本に学校制度が^{まち}でき、町人町の寺子屋が上田街学校（現在の清明小学校）となります。保作は翌年、この学校に入学し、明治10年（1877）12月上等小学校4年全科を卒業しました。保作は卒業後、教員補助として勤務していましたが、頭脳明晰・神童とうたわれ、命じられて明治天皇にご覧いただく「上田町鳥瞰図」を作成しました。

現在の上田商工会議所の敷地内に「明治天皇行在所址」碑が建っています。行在所は天皇の宿泊施設で、明治天皇が明治11年9月に北陸御巡幸^{ぼうりゆこう}の途中、ここにお泊りになりました。行在所の建物は望楼付き3階建ての擬洋風建築で、住民の寄付によって建てられました。

保作の「上田町鳥瞰図」は3階で天覧された後、献上という栄誉に浴し、また、明治天皇の給仕役という大役も果たしています。この後、上田街学校の教員補助職は辞し家業（質屋）を続けながら、文芸への興味を發揮します。

文芸雑誌創刊

飯島保作は文芸に優れた才能を發揮し、15歳の頃から風刺雑誌『團團
珍聞』、『麒麟団子』などの雑誌に毎年狂歌・漢詩・都々逸・小咄・川柳など多分野にわたり作品を投稿して、その才能は高く評価されました。保作は「花月」のペンネームで文学活動を続け、地元の文人たちにひろめるとともに、「落書会」などを発足。明治期にはいくつもの短歌・狂歌・俳句の雑誌が創刊され、花月作品は「川柳作家より観たる信州」など、書評・隨筆・評論など多分野で掲載されています。

八十二銀行の発足に尽力

保作は、上田郵便局勤務の後、実業家としても活躍し、上田商工会（現上田商工会議所）創立などに携わります。また、第十九銀行常務取締役を経て、大正8年（1919）には黒沢鷹次郎頭取の後2代目頭取に就任し、以後亡くなるまで銀行経営に尽力しました。晩年には昭和大恐慌による金融不安に直面し、「県下財政の安定と銀行経営の安定化」を図るために六十三銀行との合併推進に奔走し、昭和6年8月1日に「八十二銀行」が発足しましたが、保作は合併を目前にして腸チフスに侵され、7月26日に69歳で急逝しました。

ふきたて
花に袖にほこりや
恨みの春の山風
かかる



花月自筆の掛軸
(上田市立上田図書館所蔵)

石井鶴三（いしい つるぞう）



立体の美を追求した芸術家

明治 20 年～昭和 48 年（1887～1973）

馬との出会いから「彫刻家」をめざす

石井鶴三は、東京で美術家一家（祖父、父が画家）に生まれました。11 歳の時、父親が亡くなり、鶴三は叔母の養子となります。そこで飼っていた馬と仲良くなった鶴三は、その不思議な凸凹の感触を表現してみたくなりました。絵に描いてみましたが、納得がいかず、家にあった木片を芯にして土をつけてみると、イメージしていた馬ができました。立体的に表現することの楽しさを発見した鶴三は、彫刻家になることを決心します。

空中に絵を描き立体感を身につける



北アルプス登山中の
山本鼎（左）と鶴三（右）
(明治 43 年)

鶴三は、養子先から実家に戻り、東京美術学校（現東京藝術大学）彫刻科に入学します。画家である兄（石井柏亭）が病気で働けなくなったため、自分の学費と家族を支えるために雑誌に絵を描く仕事をしながら大学に通いました。紙を買うお金がなくても、イメージしたものをおもに描く練習をして美術の力をつけました。

「山」から得た感動を表現する

19 歳の時、石井家に下宿していた山本
かなえ
鼎（「創作版画」や「児童自由画運動」
を始めた人）の誘いで信州を旅し、初登

山の浅間山からの風景に感動し、それから毎年のように信州の山に登りました。24歳の時、彫刻家としてデビューした鶴三は、山で浮かんだアイデアを、彫刻に限らず、絵画・版画・挿絵などさまざまな作品として発表し、高い評価を受けました。

信州の美術教育に貢献

大正時代、上田の先生たちは「手工教育」(現在の図画工作)の指導方法を学ぶため、東京で活躍していた鶴三を講師に招き、彫塑(粘土などを材料として像をつくる)講習会を開催しました。鶴三は、いつも受講生と一緒に制作しました。長野市でも、絵画講習会が行われました。水彩画《少女シュミーズ》のモデルを務めた、当時13歳の前小屋津由子さんは、鶴三から「これもらってくれますか」とデッサンを渡され、丁寧な言葉遣いで、子どもを1人の人間として尊重する姿に感動したといいます。上田での彫塑講習会は、鶴三が83歳になるまでの46年間にわたって続きました。鶴三が上田で制作した作品は、上田市立美術館と小県上田教育会で見ることができます。



彫塑講習会の様子（大正13年）

「芸術は人間修行」

鶴三は、東京美術学校や自由学園で子どもたちを教えていましたが、「こうしなさい」とは言わず、「私はこう感じますが、あなたは感じませんか」とつねに相手を尊重し、共に学ぶ姿勢を貫きました。また、芸術は人間修行(道を究めていくこと)であるという信念から、何事にも真剣に取り組み、法隆寺金堂の修復や、相撲博物館館長など様々な分野でも活躍しました。亡くなる直前まで大好きな馬や山の絵を描き、85歳で眠るように亡くなりました。

伊藤松宇 (いとう しょうう)

近代俳句の改革者

安政 6 年～昭和 18 年 (1859～1943)



実業家として出発

松宇は名前を半次郎といい父佐七、母ヨヨの長男として上丸子に生まれました。23 歳の時、依田銀行の臨時社員となり上京、簿記などを学びながら銀行で働きました。27 歳の折、依田銀行から国立の第一銀行に転じ、以後明治の財界人渋沢栄一系の会社をいくつか転々とします。渋沢倉庫の支配人を勤めたのは41 歳の時です。この頃の松宇は性格も厳しく、鋭い人だったといわれています。

新しい俳句のために

松宇が俳句を知ったのは、父 (俳号洗耳) の影響によるものです。ほかに当時上田市柳町に住んでいた群馬県の俳人加部琴堂にも学び琴声と号しました。これは 16 歳のことで松宇と改めたのは 23 歳、初めて上京した年です。

明治 24 年 (1891) 34 歳の折、友人森猿男・片山桃雨たちと俳句グループ椎の友社を結成、新しい俳句を模索します。その一つが互選による句会の方法でした。今までの句会は選者一人の主導によるものでしたが松宇らの互選法は参加者全員が各自秀句を選ぶというもので、これは現在の句会で一般的に行われている方法です。その革新的な様子をきっかけ、明治 25 年正岡子規も仲間にります。そして翌 26 年に新派の俳句雑誌の第一号といわれる『俳諧』を創刊します。このように松宇と子規は親しく交際したのですが、明治 27 年松宇は静岡県の気田製紙会社に

転勤したためにその交遊はしだいに疎遠となっていました。^{そえん}俳句の改革は今日子規一人の業績のように言われがちですが、その出発は松宇らの方が早く、子規に与えた影響も大きかったのです。

江戸時代の俳書を蒐集

松宇は俳句を作るだけでなく、江戸時代の俳句を研究する国文学者として的一面もありました。30歳ころから古い俳句の本を蒐集はじめ、生涯にわたって続けました。また芭蕉をはじめ一茶ら江戸時代の俳人たちの筆跡を研究、その真偽を鑑定しました。蒐集した古俳書は今日残っているだけでも四千点、その文庫を「松宇文庫」といいます。現在講談社社長野間氏が所蔵していますが多くの貴重書が含まれ、特に重要な本は講談社が『近世俳諧資料集成』(中村俊定編)として刊行しています。これらの資料をもとにした松宇の研究論文は、その主宰していた俳句雑誌『にひはり』(のち『筑波』と改題)や『俳諧雑筆』という著書に收められています。

松宇は関東大震後の大正12年(1923)10月大屋に移住、さらに1年後権現(旧長瀬村)の久保田家に移住しました。その時の作品が写真の短冊です。しかし東京の復興とともに大正15年東京に帰り、昭和18年3月25日、^{やなか}84歳で他界しました。墓は東京の谷中墓地と上丸子の伊藤家墓地に分骨されています。

(肖像写真は『松宇家集』1926年刊より)



伊藤松宇の短冊

(執筆者所蔵)

上野尚志 (うえの たかもと)

最も早く小県郡の歴史を記した人、教育者

文化8年～明治17年 (1811～1884)



各地に文武の達人を訪ねる

尚志は、文化8年上田藩士の父上野庄蔵と母小山氏の子として生まれました。通称は昇吉郎、のち健蔵と改め、雅号を浩流亭・集義堂と名めいりんどうめいぎどうりました。9才で藩校明倫堂に入り一所懸命に儒学と武道を学び、18才で藩校生徒の世話役になりました。

20才の時江戸へ出て、幕府の学校昌平校に学びながら、砲術や兵学の塾に通い、学問や武術に優れた人を各地に訪ねました。なかでも、水戸藩の藤田東湖と会ふじとうこと、会沢安あいざわやすしとを訪ね、その天皇を中心とした國をまとめ、外國に對抗しようとする學風（尊王攘夷論）そんのうじょういりんに魅かれ、その後も二人をずっと敬いました。23才で上田に帰り、明倫堂の先生になりましたが、その後も何回か江戸に出て、上田藩士として初めてオランダ語を学び、佐久間じょうざん象山に西洋の兵法を学び、東北地方を旅して諸藩の様子を視察しました。また、嘉永3年（1850）から6年間、塩尻・国分の代官として農村の經營に務めるかたわら、兵学の講義や砲術の指導も命ぜられました。

「急務五条」と藩政改革

ペリーが来航した嘉永6年（1853）、尚志は幕府の老中職にあった藩主松平忠優ろうじゅうまつだいらちただますに、この非常時の対策として「現在の情勢をよく考えること」、「賢くて道理に明るい人に任せること」、「日本を全体として守ること」、「軍事制度を改革すること」、「下の者が意見を述べる道を開くこと」を「急務五条」として提出し、藩政の改革を主張しました。しかし、藩内には改革や人材抜擢に反対する人たちもあり、尚志は安政4年（1857）すべての職を解かれて隠居（引退）させられ、さらに同6年には蟄居謹慎（ちつきよきんしん）とされ、外出禁止と面会制限（いんきょん）を命ぜられました。この時、死罪も覚悟し

た尚志は墓石に刻む自分の事績案を書いています。

歴史研究と著書の執筆

尚志は9年にも及ぶに蟄居謹慎の間、多くの書物や資料を調べ、前々から考えていた本の原稿を書くことに専念しました。それは西洋の軍隊を解説した『西洋兵制考』や、藩主松平家の歴史を記した『藤乃基蔓』『藤乃栄蔓』などですが、特に精力を傾けたのは、小県郡（昔は上田市域は小県郡）に関して記された古い記録や伝承などを丹念に調べて、年代順に記した『信濃国小県郡年表』の執筆でした。

この『信濃国小県郡年表』は、その後も推敲を重ね、死の直前の明治17年（1884）に書きあがりました。この本は郷土の歴史や地誌研究の貴重な文献として、昭和24年に上小郷土研究会により活字本が出版され、私たちも図書館などで読むことができます。

教育者として復帰

慶応2年（1866）、尚志は蟄居を許されて、鐘美館（藩校寄宿舎）の世話係や、上田領内の古記録と寺社の調査を命ぜられました。

明治維新後は、国が進めていた国史編さん史料の校訂係や管内の救済係を務めましたが、訓導（教育職）を命ぜられ、家族と塾生を伴って中原村（現上田市真田町本原）へ移住し、菅平の開発や牧牛の係も兼ねました。その後、公立上田学校（松平学校）や県師範学校上田支校の教師を務め、66才の明治10年（1877）老齢により退職しました。

この間、新しい教育にふさわしい教材を作り、郷土の地理や歴史学習の手始めとなるよう長野県の郡名や町村名を記した『信濃国名尽』、地名や名所などを記した『信濃暗射図記』などの教科書を出版しました。

尚志は退職後もなお『信濃国小県郡年表』の修正を行いつつ畠で野菜や花を育て、さらに自宅に通ってくる40人ほどの子どもの教育にあたり、明治17年に73才で亡くなりました。墓は紺屋町八幡社の東にあり、その功績を讃える「上野集義堂碑」が上田城跡公園本丸跡にあります。

兎束武雄（うづか たけお）

地域の音楽文化を高めた教育者
明治 31 年～昭和 44 年（1898～1969）



音楽好きな少年

武雄は、上田町（現上田市）の銀行家兎束鐘一郎の長男として生まれ、幼い頃から音楽に特別な興味を示す子どもでした。しかし、父親は「音楽は男のするものではない」と考えており、武雄の音楽に対する熱い思いを快く思っていませんでした。一方、母親は音楽を好み、自ら琴を弾き、武雄の四人姉妹たちにも琴を習わせていました。

上田中学校（現上田高校）を卒業した武雄が、音楽の道に進みたいと父親に相談した時は猛反対を受けましたが、母親の協力と武雄の熱意に最後は承諾しました。父親の許しを得た武雄は上京し、東洋音楽学校（現東京音楽大学）で音楽の勉強に励みました。さらにそれだけでは満足できず、他の学校へも出かけて聴講ちょうこうし、作曲やピアノ、チェロなどを勉強しました。大学を卒業した武雄は、高等学校の教師になることを決意して上田に帰ってきました。

「からたち合唱団」の創立

上田に戻った武雄は、音楽の美しさや喜びを多くの人と分かち合いたいと考え、地域の音楽活動に力を注ぎました。昭和 8 年（1933）38 歳の時、梅花幼稚園時代の同窓生に声をかけ「からたち合唱団」を作りました。当時混声合唱団と呼ばれるものは珍しいということもあって、地域の学校や施設からの演奏依頼も多くありました。ピアノがどこにでもあるという時代ではなかったので、自分のピアノをリヤカーに乗せて演奏会場まで運び演奏しました。このような活動は多方面に刺激を与えて新

たな合唱団があちらこちらに生まれました。

心にふれるレコードコンサート

第二次世界大戦後は上田高校、城南高校（現上田西高校）の教諭を長年務めました。武雄の頭の中には常に音楽の楽しさや喜びを多くの人に味わって欲しいという思いが強くありました。そこでみんなで楽しめるレコードコンサートを考えました。しかし、ステレオもレコードも少ない時代だったので、自宅のステレオを運び、レコードは長野市にあったアメリカ文化センター（戦後連合国軍総司令部の民間情報教育局が日本各地に設置した図書館）から借りて、商工会で鑑賞会を開きました。毎月多くの人が集まり名曲に聴き入っていました。

第九交響曲初演奏の実現

昭和39年（1964）日本を代表するバイオリニストであり東京藝術大学の教授であった弟の兎東龍夫たつおが率いる芸大のオーケストラを上田に招き、第九交響曲（ベートーベン）の初演奏会を実現しました。合唱部分は、市内の合唱団と高校生の有志が集まり盛大に演奏されました。このような活動は、上田市民の中にだんだんと音楽を楽しむ生活を浸透させていました。

熱の入る地域活動

その後、上田市公民館長をして地域の文化活動に力を入れ、各地で始められたコーラスグループの指導、講演会、各学校のサークルの歌の作曲など意欲的に取り組み、上田市の音楽文化の向上に務め、71歳で亡くなりました。

小河滋次郎（おがわ しげじろう）

かんごく
監獄制度改良と民生委員制度の創設者

文久3年～大正14年（1864～1925）



人間愛に満ちた家系に生まれて

小河滋次郎は、江戸時代末期に上田城下の馬場町で上田藩医を務めていた金子宗元の次男として生れ、明治維新後に旧小諸藩槍指南小河直行の養子となり小河姓を名乗りました。同年生まれの山極勝三郎とは「竹馬の友」であり、生涯の親友でした。金子家は代々医者で、兄も上田慈善会（盲人教育機関で上田盲学の前身）を創立するなど、辛い人のために心をつくす家系に生まれました。その後、東京帝国大学法科大学等で学び、明治19年内務省（現法務省）に入り、ドイツ留学を経て監獄（刑務所）行政等に心をこめて取り組みます。

「小河先生が笑った」

内務省では「笑った顔を見たことがない」と噂されるほど生真面目でしたが、私生活では、銭湯で入浴中に友人の尻をつねるつもりで他人の尻をつねって大声で怒鳴られたり、乗り慣れない自転車で商店に飛び込んだり、馬車に衝突したり、また、お汁粉5～6杯、トロロ汁17杯を一度に食べるなど様々な逸話があり、冗談好きで時には失敗もする人間味あふれる人でした。

弱き人の友となって

滋次郎は、未成年者に対する刑事制度の改良に取り組み、「罪を犯した人の自由を奪うのは懲らしめるためで無く、新しい出発に向かっての心の教育を計るため」として、明治35年に川越幼年館を誕生させました。

幼年館では勉強や運動をさせ、看守を先生と呼ばせるなど、現在の少

年刑務所や少年院につながる矯正教育に重点がおかされました。

また、大正 7 年、刑罰の厳しすぎる少年法改正案に「少年は教育の対象で、断じて司法処分にすべきでない」と反対し、まさに弱き人や不仕合せな人達の味方であり、友でもありました。

縁の下の力持ち

大正 7 年晚秋の寒い夕方、大阪府知事の林市蔵は床屋の鏡越しに、着古した浴衣姿の女性が泣き叫ぶ赤子を背負い、小学生の子どもを連れて夕刊売りをしている様子を目にしていました。病気の夫の治療代と生活費を稼ぐために、寒さに震えながら必死に働いている姿を目にした市蔵は、政治顧問をしていた滋次郎と相談し、ドイツの事例を参考にして生活困窮者の救済組織「方面委員」（後の民生委員）制度を創立しました。

方面委員の目指すところは「吾々委員は世間のため、人道のため、弱き人や不仕合せの人達の味方となつてできるだけの犬馬の労を惜しまぬ覚悟」、「その仕事は全く掛け値なしの捨て石的犠牲であり、縁の下の力持ち」との想いでいた。

滋次郎と市蔵が創立した方面委員制度は次第に全国に広まり、10 年後の昭和 3 年には全都道府県に設置されました。

竹馬の友への弔辞

大正 8 年頃から病気がちであった滋次郎は、同 14 年 4 月 2 日 62 才で病死しました。死後、従四位勲四等に叙せられ、大阪府は謝恩葬で滋次郎の業績に報いました。この時、結核を患い療養生活を送っていた山極勝三郎は「竹馬の友たる小生の驚きと痛惜の一通りならざる次第」と切々たる思いを弔文として令息（子ども）に伝えたのでした。

昭和 15 年、上田市方面委員の代表者が、同制度創設の偉業を讃えるため、全国の委員から寄付を募って、滋次郎の胸像を上田城跡公園内に建立しました。滋次郎の胸像は、福祉のシンボルとしてその行方を静かに見守ってくれています。

笠原善吉 (かさはら ゼンキチ)

製糸業界を支え発展に尽くした人

明治 10 年～昭和 28 年 (1886～1953)



学業から製糸業へ

笠原善吉の父房吉は、諏訪郡平野村（現岡谷市）で製糸業を営んでいましたが、明治 33 年 (1900) 3 月、事業拡張のため上田の常田に「常田館製糸場」（釜数 120）を設立しました。ときだ ときだかん せいしじょう

東京で勉強中だった善吉は、明治 37 年、卒業と同時に家に帰り、22 歳の明治 40 年 5 月、常田館の経営管理一切を任せられ、520 釜の製糸工場経営者となりました。

製糸業にかける情熱

常田館製糸場は、創業翌年の明治 34 年には、上田で最大の釜数 (196 釜) を持つ大工場となり、その後も次々と規模を拡大していきました。製糸業の経営も順調で、上田の製糸業といえば、常田館で代表されるようになりました。

善吉は、繁忙期には工場で生活することが多く、早朝や夜は工場を見回り、交代で宿直をするなど、常に細かいところにも目配りを怠りませんでした。はんぱうき まゆ繭の購入時期には、従業員とともに朝早くから深夜まで働き、一日の労をねぎらう場にはいつも善吉の姿がありました。一粒の繭や一枚の紙でも大切にする心を教え、仕事の面では厳しい経営者でしたが、従業員を信頼して時には意見を求めるっていました。

大正 11 年には、欧米の絹業視察の一員として参加し、海外へも目を向け、特に生糸相場に注意を払い、相場の上下を記録し、金利の安い金融機関を利用するなど、健全な工場経営に努めました。製糸業は浮き沈みが激しく、倒産や廃業をした製糸工場が多かった中で、善吉は常に細心

の注意を払い、好景気にも浮かれることなく堅実な経営に徹して会社を守りました。

大正4年、兄と協力して東京神田小川町に笠原組東京支店を設置。昭和7年に株式会社笠原組に改め、東京事務所に本社を置き、同8年には株式会社笠原組上田工場と社名を変更しました。

戦後の復興と未来への遺産

第二次世界大戦後は、中断していた製糸業の復活にいち早く取り組み、昭和21年6月には、240台の多条操糸機械を設置して、念願の製糸業を再開できたことは、善吉にとってこの上ない喜びとなりました。

昭和22年には社長に就任し、翌23年笠原製糸株式会社と社名を変更しました。家業の製糸業経営とともに、製糸業関係の役職、上田蚕種組合の理事をはじめ、各方面の仕事も加わり忙しい毎日が続きました。昭和28年、社用で上京中の東京本社において急病のため、68歳の生涯を閉じました。

善吉が残した現在の笠原工業株式会社には、常田館や繭倉庫のほか、様々な製糸場施設が良好な姿で保存されています。平成20年には上田駅周辺道路の拡幅工事に伴い、巨大な木造4階建ての繭倉庫などが消滅の危機を迎ましたが、会社はひきや独力で曳家移転して建物を保存しました。

現在では「旧常田館製糸場施設」として、国の重要文化財に7棟、市の有形文化財に8棟が指定され、蚕都として繁栄した往時の姿を伝えています。



重要文化財「旧常田館製糸場施設」

(笠原工業株式会社)

金井 正 (かない ただし)

思想家であり、社会革新の先駆者
明治 19 年～昭和 30 年 (1886～1955)



兄汲二の死

金井正は、蚕種製造農家で、国分銀行の頭取もしていた父一平と母うたの三男として、小県郡神川村国分(現上田市国分)に生まれました。早世した長男に代わり、家を継ぐはずだった次男汲二も病に倒れて亡くなってしまい、正が家を継ぐことになりました。

上田中学校（現上田高校）の 8 歳後輩で、生涯正とともに歩んだ山越脩蔵は、「金井正さんのこと」のなかで、兄の死により家督相続をしなければならなくなったり、亡兄の妻との結婚から、東京の大学で文学研究をしたいという自分の将来の望みが断たれ、「これまで考えていた自分の進路を根本から変更することになった」と記しています。

兄の死は、正を「人間とは何だろう」、「どう生きるべきか」をさぐる哲学を学ぶ人に向かわせました。ギリシア哲学史からはじまり、ウィリアム・ジェームズ（アメリカ）、アンリ・ベルクソン（フランス）、カント（ドイツ）などの原典や英訳本で勉強し、西田幾多郎や田辺元の哲学を読み、『哲学雑誌』や『哲学研究』を愛読するようになりました。

軍備縮小・非戦・満州放棄論の主張

21 歳になった明治 40 年、「現実生活と哲学との間の矛盾を感じていた」正のものの考え方には変化がありました。徴兵検査を前に、幸徳秋水や堺利彦らが結成した「平民社」を訪ね、『平民新聞』を学習した神川村読書会を通して「一個ノナル社会主義者」（「社会主義管見」1910 年）になったこと。徴兵検査の結果、甲種合格で入営が決まった時の送別会で、「私ハアマリ之ヲ喜バンノデアリマス」、その最大の要因は、「自分が軍備縮少ト言フ考ヲ持ッテ居ル」という軍備縮小論を述べたこと。さらに、入営生活を回顧して「眞実軍隊ハ自分ノ性ニ合ハヌ」（「輸

卒之回顧」1909年)と非戦論を綴ったこと。第一次世界大戦の最中の1905年には、満州放棄論(「軍備ニ関スル卑見」)を提唱したことなどです。観念的哲学からの決別でした。

その後、河上肇^{かわかみはじめ}や戸坂潤^{とさかじゅん}(敗戦直前に長野刑務所で獄死、身元引受人となる)の思想に共鳴し、昭和21年には日本共産党に入党していきます。

全国に発信した新しい教育と文化の創造

新しい教育と文化の全国への発信が、画家山本鼎^{かなえ}との出会いから始まりました。鼎はパリ留学の帰路立ち寄ったロシアの子どもたちが描く個性的で創造性豊かな絵画、農閑期の農民たちの芸術性豊かな農民美術作品に感銘を受けました。同じことが日本でもできないものかと、正と山越に問い合わせて始まったのが児童自由画と農民美術運動でした。自分が見て思い感じたままを自由に描くことを基本にした児童自由画は、今日の絵画教育の基本となりました。また、農民美術は、地場産業として地域の活性化に寄与してきました。いずれも大正デモクラシー期の1919年に神川村から始まり、全国に広がり大きな成果を生みました。

1921年には、哲学者の土田杏^{つちだきょうそん}村と山越脩蔵が中心になって、「学問の中央集権的傾向を打破し、地方一般の民衆が其の産業に従事しつゝ、自由に大学教育を受くる機会」(趣意書)とした信濃(上田)自由大学を開講させ、県内外へと広がりました。戦後、この大学の再興のためにも、正は労を惜しませんでした。

村農業の発展のために

51歳になった昭和12年、正は神川村長に就任しました。9年間にわたり戦時下の厳しい村政をリードし、昭和20年1月に辞任しました。

69歳で生涯を閉じるまでは、農耕に従事する生活を送りました。その間、群馬県嬬恋村^{つまごいむら}の浅間山麓開拓の分村計画や上小ミチューリン会設立に協力しました。



農民美術の制作(大正9年)

金子ふじ (かねこ ふじ)

上田市更生保護婦人会の生みの親
明治 19 年～昭和 44 年 (1886～1969)



金子ふじは、岩手県の造り酒屋に生まれ、何不自由なく豊かに育てられました。地元の小学校卒業後、上京して高等女学校に通い良妻賢母としての教育を受けて郷里に帰り、金子亀次郎と結婚しました。

亀次郎は検事をしていたため、若い頃は各地を転勤し、その間に四男二女の子宝に恵まれました。ふじは子どもたちをかわいがり、多くの来客にてきぱきと対応しながら、読書、絵画、和歌などを趣味とする多芸多才な人でした。

夫の最後の任地は長野県地方検察庁上田支部で、昭和 12 年 (1937) に上田に赴任し、夫は退官後に自宅で法律事務所を開きました。ふじは本籍を上田に移し、婦人の団体活動を始めました。

国防婦人会へ参加

当時、慈善活動や援助活動を目的とする「愛國婦人会」や「国防婦人会」がありました。昭和 17 年国策として「大日本婦人会」に統合され、ふじは婦人会の活動経験はありませんでしたが上田地域の会長に推挙されました。その後、長野県の大日本婦人会副会長を務めていた時に終戦を迎えました。

終戦により大日本婦人会が崩壊し、遺族会婦人部、農協婦人部、日本赤十字奉仕団などの婦人団体の活動が活発化する中で、昭和 21 年 (1946) 戦後第 1 回目の上田市議会議員の選挙が行われ、女性として初めて立候補したのが花岡みよしとふじの二人でした。選挙の結果、花岡は当選し、ふじは惜しくも落選てしまいました。

ふじは男女同権を口にしながら「女性は男性を立てて内助の功に徹すべし」という明治生まれの女性としての意識から脱しきれず、女性の支

持が得られなかつたのであろうと分析されました。

保護司と更生保護婦人会の発足

ふじは昭和 22 年（1947）上田地区の保護司に命じられ、昭和 39 年（1964）まで務めました。その間に上田市更生保護婦人会を発足させ自ら会長を務めました。更生保護婦人会は保護司を補佐し、将来保護司の予備軍として研修を重ねる全国的な組織です。

保護司としてのふじは、社会環境や家庭の事情のために罪を犯した青少年たちを母親的な立場から暖かく見守り、保護観察中の青少年の話を親身になって聞き、家に泊めてやったり、時には小遣いを持たせてやつたりと心優しい一面をのぞかせました。

昭和 26 年（1951）自ら会長を務める更生保護婦人会をバックに、上田市議会議員の選挙に再び立候補しましたが、またしても落選してしまい、その後は、保護司の仕事一本に絞り活躍するようになりました。

保護司をライフワークに

昭和 31 年（1956）には上田地区の保護司会長も務めました。また、およそ 17 年間の実績が認められて、関東地区更生保護委員会表彰など数々の表彰を受け、昭和 39 年には時の法務大臣から表彰を受けました。これを機に後進に道を譲り、保護司の仕事と上田市更生保護婦人会の会長も辞しました。その時ふじはすでに 79 歳っていました。

ふじは、個性が強く理論的思考力の持ち主であり、時代を先取りして実践に移す活動家で、戦後の波に乗って精一杯生きようと努力しました。また、日夜民主主義を勉強し、死の直前まで中江兆民なかえちょうみんの著書を愛読していました。

晩年は友達に囲まれて楽しい日々を過ごし、昭和 44 年 6 月 14 日、83 歳の天寿を全うしました。墓は上田市新田の大輪寺にあります。



更生保護婦人会の少年院慰問

金子行徳 (かねこ ゆきのり)

シナノケンシを創業した実業家
明治 11 年～昭和 40 年 (1878～1965)



明治の村から欧米へ

「行徳さんは お米一粒から大切にした」と語る人が多くいました。行徳は、明治初期に小県郡殿城村赤坂（現上田市）に生まれ、物を大切にする心や人に感謝する心、勤勉な姿勢を親や村の人から学びながら成長しました。上田中学（現上田高校）^{けんしほうせき}に入ると上田までの長い距離を歩いて通い、中学では後に製糸業や絹糸紡績業の道に進む手引きをしてくれた良き友人にも恵まれました。

上田中学を卒業した行徳は、東京の正則英語学校に学び、明治 34 年に野沢中学（現野沢高校）の英語教師となりました。明治 39 年、日露戦争直後に満州（現中国東北部）に行き、陸軍通訳として活躍しました。このときロンドンタイムス紙主筆のモリソンとも知り合いになりました。明治 42 年、東京報知新聞に入社し海外特派員となり、ヨーロッパやアメリカで活動、発明王エジソンにも取材したといいます。

旧友とともに製糸業を

明治 44 年、東京報知新聞を退社した行徳は、中学時代の友人小野三男と製糸業に専念、製糸業が「生死業」といわれる厳しさを学びました。製糸業は利益も大きいが、購入する原料繭の値段、生糸やドル相場の変動によって一夜にして会社が倒産という仕事だったのです。苦楽を共にした三男は、上田の丸山家（木屋平）^{きやひら}から上伊那郡小野村（現辰野町）の小野家へ養子に入り、製糸業に力を注いだ人です。養父の小野光景は横浜で生糸貿易の小野商店を経営し、そのころ横浜五大生糸商社のひとつに数えられた大実業家であり、政治家でもありました。

信濃絹糸紡績を創業

大正 7 年 (1918) 行徳は丸子の生糸結社「依田社」の付属施設として稼働していた絹糸紡績などの部門を独立させ、現在のシナノケンシ株式会社につながる信濃絹糸紡績を立ち上げました。絹糸紡績は製糸作業から出る屑や、製糸に使えない繭などから絹の糸を紡ぎ出す作業です。これは、農家の人々が心を込めて一生懸命に育てた繭を最後まで無駄なく生かして使うということであり、行徳が少年時代に受けた「物を大切にし、人の努力に感謝する心」を忘れない事業でした。会社設立のための資金は地域の実業家が、技術は上田蚕糸専門学校の教授が協力しました。行徳は専務取締役（社長は依田社社長工藤善助）としてスタートし、順調に事業を伸ばし、社長となりました。

大正 8 年、工藤善助が日本の資本家代表としてニューヨークで開かれた第 1 回国際労働者会議に出席することになりました。そのとき、行徳は善助の随行員（秘書兼通訳）として、アメリカへ渡りました。このときの経験も事業の「先を見通す力」となったのでしょう。製品の売り惜しみをせず、工場保険に加入、金融恐慌へ適切に対応するなど、すぐれた経営手腕で会社を発展させました。

第二次世界大戦後は、紡績業が衰退するなかで電子機器事業への転換も試み、軌道にのせました。また、殿城村長や県公安委員長などの公職も務め、生まれた村や県へも貢献しました。

丸子金子図書館への貢献

行徳は昭和 40 年 1 月 6 日に亡くなりましたが、その遺志によりシナノケンシ株式会社の本社がある丸子町（現上田市）に、図書館建設費として 1,300 万円が寄贈されました。翌 41 年 5 月に「金子」の名を冠した「丸子金子図書館」が開館しました。同図書館は平成 24 年（2012）に閉館しましたが、行徳の心は蔵書とともに新たに建設された上田市立丸子図書館に受け継がれています。

工藤善助（くどう ぜんすけ）

長野県の蚕糸業界をリード

安政元年～昭和13年（1854～1938）



蚕種業から政治の世界へ

工藤善助は幕末の丸子に生まれ、少年時代から蚕種業を学び、22歳（明治9年）で自立、蚕種の製造販売をはじめます。同族の家では江戸時代から藍玉も商っており、渋沢栄一も訪れています。善助は製造した蚕種を奥州（福島県）や関東各地に売り歩きました。

また、政治的な手腕にも優れ、若くして丸子村長（4回）となりました。その後小県郡会議員（3回）、県会議員（3回）に、明治37年（1904）には衆議院議員（2回）にまでなりました。その間、明治15年には地域の金融機関としての依田銀行を創業して取締役となり、同33年（1900）には頭取に就任しています。

蚕種業界のリーダー

善助は明治19年（1886）長野県蚕糸業組合の常任委員（高橋平四郎・大里忠一郎・南条吉右衛門ら）に選任されて以降、蚕糸業界で大活躍します。信濃蚕種組合副組長（組長は藤本善右衛門）として蚕種検査問題などで県知事や農商務大臣と渡り合い、明治33年には長野県蚕種同業組合連合会議議長、同36年には組長となり県蚕種業界をリードしました。また小県郡長中島精一らとともに小県蚕業学校（現上田東高校）の創設や校長に三吉米熊を迎える活動にも力を入れます。明治37年衆議院議員に選ばれると松本に蚕業試験場を設け東京蚕業講習所夏秋蚕部（42年）を誘致、上田蚕糸専門学校（現信州大学繊維学部）の誘致（43年開校）にも尽力しました。

製糸業界に貢献

丸子では明治 22 年 (1889) に器械製糸場が創業、日本有数の製糸結社「依田社」^{よだしゃ}としてアメリカへ生糸を輸出していました。善助は蚕種業のかたわら、明治 40 年 (1907) に丸子でカネ三製糸場の経営に着手し、依田社の一員となります。

明治 43 年には、蚕種業から手を引いて製糸業に専念し、大正 2 年 (1913) 依田社初代社長下村亀三郎が急死した後、善助が第 2 代社長に就任します。以後、製糸技術の改良や労働者待遇の改善などに努め、依田社を生糸輸出量全国 4 位の製糸結社に成長させます。

その一方で、県や国の製糸業発展にも貢献しました。大正 5 年長野県生糸同業組合連合組長に選ばれ、昭和 2 年までその職を務めました。蚕種業界と製糸業界のリーダーとなった善助は、大正 8 年 (1919) 日本の資本家代表としてアメリカで開かれた第 1 回万国労働者会議に出席し、労働時間の短縮問題に取り組み、帰国後は労働者の待遇改善に努めます。その後も欧米諸国を訪問し、絹業関係施設の視察と同時に絹業関係者と話し合い、輸出生糸の品質改善を図りました。

大正 12 年 (1923) の関東大震災で、横浜の生糸倉庫は壊滅状態となり、全国から集荷された生糸は焼き尽くされ、日本の製糸業界は危機におちいりました。このとき善助は東京に長期滞在して奔走、その危機を救いました。

また、地域交通網発達の先鞭^{せんべん}をつけたことも見逃せません。大正 7 年 (1918) に丸子鉄道 (大屋駅～丸子町駅) を開業、これが上田地域の私鉄ブームに火をつけ、次々と電車路線が開業します。このころ開業した別所線は現在上田でただ一つ存続している路線です。

久米正雄（くめ まさお）

早成の才人

明治 24 年～昭和 27 年（1891～1952）



久米正雄と信州上田

久米正雄は、明治 24 年（1891）11 月、上田の片平町（現上田市大手）の借家で生まれました。久米家は「（御維新の折に）扶持と交換に二千円ばかりの公債と本郷五丁目 43 番地に百坪ばかりの地所を貰う程度の士族で、山の手ながら、生糸の江戸っ子」（『吾が少年時代』）でした。父由太郎は、明治維新後、東京師範学校を卒業し、福島県に新設された師範学校の校長代理として赴任しています。

その後、信州上田に高等小学校が建設され、その校長先生に「りっぱな先生を」と希望し、父由太郎がその任につきました。久米によれば、「破格の待遇であった」（『吾が少年時代』）と記されています。久米家はそんな経緯で、明治 15 年に上田へ移住し、由太郎は明治 28 年に小県郡立高等小学校兼上田尋常小学校の校長となっています。

突然の「父の死」

正雄が 8 歳の時（明治 31 年）に、父由太郎が校長を務めていた上田尋常高等小学校上田分教場が焼失し、その責任をとって父が自刃するという、突然の出来事が起こりました。

正雄には父の死が強烈な記憶として残ります。それは正雄に、「責めを負って自刃した」「武士道教育からの虚栄」から「父は死なずともいいものを死んだ」という釈然としない気分をもたらし、正雄はこのことに長い間こだわりつづけます。

しかし、正雄はこれを作品『父の死』に続く、『不肖の子』『吾が少年時代』として発表し、父の死を徐々に受け入れていく過程が綴られています。

俳人・小説家として

父の死後、一族とともに母の実家がある福島県へ転居し、猪苗代湖疎水（安積疎水）を引いた役人だった母方の祖父のもとで安積中学校（現安積高校）を卒業しました。中学時代にはすでに「三汀」の俳号で俳人として活躍し、作品の質の高さでも定評がありました。東京の第一高等学校（現東京大学教養学部）を経て東京帝国大学英文科へ進学後にも文学活動に励み、雑誌「新思潮」（第3次・第4次）を創刊します。久米はここで『父の死』を初出掲載しました。

また、芥川龍之介・菊池寛らとともに夏目漱石に師事します。戯曲『牛乳屋の兄弟』、小説『破船』『月よりの使者』、新聞・雑誌連載小説の作家として知られるようになりました。

久米を「世にも珍しい早成の才人」と評したのは作家江口渙ですが、その評のとおり、小説家・戯曲家としても独特の文学性を評価されており、また、まとめ役として戦時中の「文学報告会」理事、戦後の「鎌倉文庫」代表などを歴任し、文学以外でもリーダー的存在でもありました。

久米、郷里上田を訪れる

昭和16年11月、上田市で久米の講演会が開かれました。父の死にこだわり、その影を引きずりながら、久米は、父と行った別所温泉へと足を伸ばし、かつての日々を思い出し、大島や旅館に次のような短冊を残しました。

蟋蟀や 湯壺の外の 灯も濡れて 別所にて三汀

また、上田を故郷として懐かしみ、久米はその生家辺りを尋ねます。

吾が生まれし 家は何処と 落ち葉踏む

上田城前の借家河合家を訪れ、楽しい思い出とともに、久米は上田を故郷として再認識したのでした。

倉田白羊（くらた はくよう）

農民に温かな目を注ぐ高潔で不屈の画家

明治 14 年～昭和 13 年（1881～1938）



夏目漱石の白羊評

大正から昭和初期にかけて、倉田白羊は多くの人々から新進気鋭の画家として注目を浴びていました。大正元年（1912）、東京朝日新聞の「文藝と芸術」欄で、文豪にして文人画家でもあった夏目漱石による美術評論は、白羊の文展（文部省展覧会）入選作《川のふち》を取り上げて次のように述べています。

「…自分は、音楽会の帰りに山寺の門を潜ったような心持ちを味わった。（中略）彼等の画は夫程静かだったのである。けれども其静かさは歓樂の後に来る反動の淋味を以て自分に訴えたのではない。…」。白羊が当時画壇の頂点にあった文展の中で高い評価を得ていたことがわかります。

生い立ち

倉田白羊（本名重吉）は、漢学者の父・幽谷（本名努）と母・静子の次男として明治 14 年 12 月 25 日に生まれました。決して豊かな家庭ではありませんでしたが、母の武家の娘らしく貧窮をものともしない気丈な姿は、後の白羊の生き方に影響をあたえました。明治 34 年（1901）、苦学の末、黒田清輝・浅井忠らの指導のもと、優秀な成績で東京美術学校を卒業すると、破格の高給で中学校教師に迎えられました。しかし白羊は画家への大望を捨てきれず、3 年で退職して時事新報記者と画家との二重生活を始めました。精進の成果は文展での第 1 回・第 2 回・第 4 回・第 6 回展での入選に現れます。前掲漱石の批評は、第 6 回文展入選時のものです。

画壇での高い評価

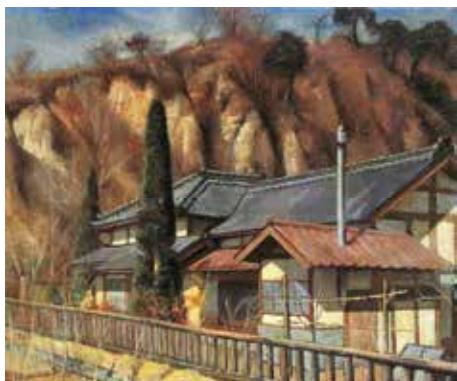
明治 40 年（1907）、石井柏亭・山本鼎・森田恒友たちは美術文芸雑誌『方寸』^{はくてい かんそ つねとも}を創刊。白羊も翌年、小杉未醒とともに方寸同人となり、隨筆・短編小説なども発表。また「パンの会」に参加するなど、新鋭文筆家をはじめとする同時代人との交遊からも、彼の芸術全般への関心と意欲が感じられます。同年時事新

報社を退社。翌年の結婚を契機に画業に専念することとなりました。大正元年、太平洋画会出品作『燈明台』が宮内省買い上げとなつたほか、流行冒險小説家・押川春浪らの『犬狗俱樂部』で挿絵を描くなど、画壇をはじめとする社会での位置が定まり活躍の様子がうかがえます。

しかし、画家仲間の相次ぐ渡欧・留学を、白羊自身はどのように感じていたのでしょうか。大正2年『洋画の手ほどき』を出版し、その原稿料をもとに新しい画題を求めて小笠原諸島に半年滞在。《島の女》《ベンチャミンの像》等たくさんの作品を制作しています。大正4年(1915)、小笠原滞留時の作品40点を日比谷美術館で発表。その個展も大変好評でした。

農民美術運動を実践

大正9年、それまで同人として活躍していた院展を未醒・鼎・恒友らと脱退し、大正11年(1922)、梅原龍三郎らと7名で「春陽会」を創立。この頃、山本鼎に懇請されて農民美術研究所福岡所長兼教育主任として上田市に移住しています。以後上田市神科周辺をモチーフにした250号の大作《たき火》をはじめ数々の名作を失明の不安を抱えながら最晩年まで春陽会を中心に発表しました。そして白羊は、鼎が提唱した児童自由画教育と農民美術、2つの運動の実質的推進者・実践者として多大な貢献をしています。この運動は単に児童や農民だけでなく、地域の住民に芸術文化の力を浸透させる原動力となりました。それら広く多くの人々に支えられた芸術運動の展開は、ひとえに高潔で温かな人柄、住民に愛された画家、白羊その人だからこそできただことでしょう。



《崖を負う家》

(昭和3年・常楽寺美術館所蔵)

倉田文作（くらた ぶんさく）

仏像彫刻の研究や文化財保護に大きな功績

大正7年～昭和58年（1918～1983）



青少年時代と仏像調査

倉田文作は、画家の倉田白羊^{はくよう}の次男として、大正7年に千葉県の館山^{たてやま}で生まれました。大正11年、父の白羊は山本^{かなえ}鼎^{たかし}によって神川村大屋（現上田市大屋）に新たに建てられた日本農民美術研究所に副所長兼教育部長として招かれたため、一家で上田へ移住しました。

昭和2年には神科村大久保（現上田市大久保）に白羊はアトリエを新築し、少年時代の倉田は豊かな自然環境で育ちました。神科小学校から旧制上田中学（現上田高校）、青山学院を経て、早稲田大学文学部を卒業し、昭和20年には文部省美術研究所に入所しました。戦争により全国各地の寺院などの文化財建造物が破壊され、倉田は同年から全国各地の仏像調査に精力的に取り組みました。また、敗戦後に連合国軍総司令部（G H Q）が日本刀を武器とみなして接收や廃棄を始めた時には、日本刀は美術工芸品であることを認めさせ、日本刀の廃棄や海外流出を防止し、大きな功績をあげました。

海外へ日本古美術を紹介

昭和25年には国立博物館勤務を経て、文化財保護委員会保存部美術工芸課に勤務しました。昭和27年から34年にかけてはアメリカ・フランス・イギリス・オランダ・イタリアで日本古美術展が開催され、出品資料の展示や解説を担当し、あわせて海外の東洋美術部門の調査研究に努めました。昭和40年から41年にもアメリカ・カナダで日本古美術展を

開催し、得意な英語を用いて解説し、日本の古美術の素晴らしさを海外の人々に紹介しました。

『仏像のみかた』など刊行

倉田は国内・海外の長期にわたる仏像調査や研究の成果にもとづき、多数の著書・論文を執筆しました。このうち昭和40年に出版された『仏像のみかた』は代表的な著書で、仏像の見方の入門書として大勢の人々に読まれ、参考にされました。この他に『原色日本の美術』5 密教寺院と貞觀彫刻、『日本の美術』6 彫刻、『在外日本の至宝』8 彫刻などで、平安時代初期の仏像彫刻や海外にある日本の仏像について、詳細に紹介しています。長野県関係では県文化財専門委員として県宝の指定と解説をした『長野県文化財図録』や『信濃の仏像』の解説をしました。

文化財保護と奈良国立博物館長

昭和42年からは、ユネスコ専門家会議に日本代表として参加し、文化財の不法輸出入防止や文化財の国際交流に尽力しました。昭和50年からはユネスコ・ローマ文化財保存修復国際センター理事と財務委員に選ばれ、国際的な文化財保護活動で活躍しました。同年からは奈良国立博物館長に就任し、特別展「日本佛教美術の源流」などを開催し、国内外の貴重な仏像・仏画を紹介しました。昭和58年、奈良国立博物館長の在任中に、病気のため64歳の若さで急逝しました。わが国の佛教美術研究の第一人者として、文化財の保護に尽くした生涯でした。

黒沢鷹次郎（くろさわ たかじろう）



積極的な資金貸付により器械製糸業発展に貢献

嘉永2年～大正8年（1850～1919）

鷹次郎を育んだ穂積村と黒沢家

鷹次郎は、南佐久郡崎田村（後に穂積村、現佐久穂町穂積）の黒沢利左衛門とつなとの間に生まれた8人の兄弟姉妹の長男でした。郷里の村は、昔から農業を本業にし、副業として楮こうぞ製紙や木材、薪炭しづたんや薬用人参栽培などをしていましたが、明治30年ころからは養蚕業ちちぶが本業になった村でした。また、明治17年に発生した秩父事件では、国民党軍の襲撃を受け、最後の戦闘まるとが行われた村でした。

黒沢家は、「丸ト」の屋号で、酒造や太物（綿織物や麻織物）の中継ぎ販売業を営み、村の大黒柱でした。鷹次郎は、7歳から祖父や伯父に算術や習字、漢籍かんせきを学び、17歳から家業に従事し、太物の中継ぎ販売のために現在の群馬・山梨・静岡・東京などの各地に出かけました。18歳の時からは横浜へ往来して生糸と薬用人参の輸出に力を注ぎ、国内から海外を視野に入れた商売をはじめました。

明治2年、21歳になった鷹次郎は、同郡畠八村（現佐久穂町畠）小宮山新七郎の三女まつめと結婚し、新たな門出を迎えました。

銀行業との関わり

明治7年、県内の金融業や製糸業に手広く関わっていた小野組が破綻はたんし、県内の経済が混乱するなか、明治9年に彰真社しょうしんしゃが長野西之門町（現長野市）に開業しました。彰真社は、佐久地域の豪農商を中心に設立された長野県最初の近代的な金融機関です。鷹次郎は東京出張所の事務を担当することになり、金融事業に携わることになりました。

明治10年11月8日、彰真社の設立者のほとんどに鷹次郎を加えた10人により、上田町（現八十二銀行上田支店の場所）に第十九国立銀行が開業され、29歳の鷹次郎は取締役に就任しました。

第十九国立銀行は、県内からの輸出用生糸の集散地となっていた上田に設立されました。生糸荷為替（出荷者が振り出した為替手形を銀行が買い取り、受取側の銀行を通じて代金を回収する仕組み）を活用することにより、代金未払いなどの危険性を減らし、資金力の乏しい業者でも安定した出荷を実現しました。

第十九銀行の発展

鷹次郎は、明治 20 年に頭取に就任し、事業の拡大を図るために貸付先の重点を製糸業の著しい発達をみせていた諏訪・岡谷に移す製糸金融拡大策をとりました。それは、恐慌により打撃を受けた諏訪製糸に資金を投じ、その隆盛をもたらすことになりました。その一方、健全経営を柱に、安全な貸付けをするために融資先の厳格な調査や営業報告書の提出などを講じ、同行を内容面でも組織面でも盤石なものにしていきました。また、明治 30 年には国立銀行から私立銀行に変わり、第十九銀行と改称するとともに西洋風の本店を新築して人心の刷新を図りました。

第十九銀行は、鷹次郎の死後、六十三銀行と合併して現在の株式会社八十二銀行となり、県下最大の地方銀行として発展を続けています。

倉庫業の創業

製糸金融拡大策は、資金の貸付担保となる原料繭を保管するための倉庫業という新産業を産み、鷹次郎は飯島保作らと上田倉庫（明治 27 年）・諏訪倉庫株式会社（同 42 年）を創設しました。また、明治 29 年 5 月には上田小県地域における商業界の結束の要となる上田商業会議所（現上田商工会議所）の初代会頭に就き商業界の発展に寄与しました。

八十二銀行上田支店と岡谷市の成田公園には、鷹次郎の業績を後世に伝えるため銅像が建立されています。

（本稿写真是『八十二銀行史』（株）八十二銀行編 1968 年刊より）



明治 20 年新築の第十九国立銀行本店

河内山寅 (こうちやま とら)

明治・大正期に活躍した女性教師

安政2年～昭和5年 (1855～1930)



寅の生い立ち

寅は、上田藩士河内山長善の長女として、鷹匠町に生まれました。
父親は藩校の先生をしていました。母親は上野庄蔵の娘で、学者上野尚志の姉です。寅は小さいころから本を読むことが大好きでした。母からは、女子の学習書としての『女大学』や『庭訓往来』などを与えられましたが、それだけでは満足できず、父から男子の学ぶ『三字経』などを学びました。ある時、寅が母の生家上野家を訪れ、そこにあった書物を手にして読む姿が尚志の目にとまりました。寅が勉強したいという強い意思を示したことから、兄とともに尚志宅へ通い漢学を修めることになりました。しかしこの時代、武家の家でも娘に漢学まで学ばせることはまれであったので、通学途中で石を投げられたり悪口を言われたりしたこともあります。

教師として

明治6年 (1873) 小学校が開校され、父が主席教員として採用されたので寅も同じ学校に勤務したのですが、2年後父がふとした病で他界してしまいました。これからのことと母と妹と相談し、もう一度勉強し直そうと姉妹で変則中学校に入学しました。母は内職をして学資の援助をしてくれました。当時は世間から笑いものにされ、親戚からは「女子に学問させて何になる。二人とも退学させて結婚させなさい。」と叱られたといいます。二人は一心に勉強して卒業しました。更に長野師範部第一期試験に合格し、松平学校に勤務することになりました。寅は勤務のか

たわら教育学・算術・理科などを学び、学力認定によって小学校本科正教員の免許状を受けました。寅の授業は非常に厳格でしたが、子供たちの心をよくつかんでおり、授業は楽しく、児童からも慕われていました。寅は自伝の中で「私の児童教育上に重きを置くところは、ただ劣等生優待のみ」と記しています。教育に心を注いた結果、明治37年に長野県より普通教育奨励として金牌を受け、同39年には文部省より教育功績状と金150円を、上田町より腕時計が贈られました。

子守教育

寅は、教職のかたわら母親の教養を高めるために婦人会を設立し、各種講習会を開いて広く活動しました。その一方で子守教育にも力を注ぎました。幼児任せられた子守が、多くは貧しい家の子女で、保育の何かも知らず、字も一字も知らず、善悪も分からぬものが少なくないとして、教育の必要を訴えています。このようにして開かれた子守教育所は社会から歓迎され、寅は率先してその教育に当たりました。子供の扱い方・読み物・算術・日用文等少しづつ教え、3, 4か月もすれば、父母にハガキを出すことが出来るようになったということです。

教職を終えて

大正7年（1918）64歳で42年間の教職を退いた寅は、孫の「ひで」と一緒に住んでいました。鷹匠町で火事があった際、家は焼けませんでしたが、火事と雷が大嫌いだったので、家を売って娘の嫁ぎ先片山家へ身を寄せ、そこで一生を終えました。74歳でした。河内山家の墓は、紺屋町八幡社東側の上野尚志墓の隣にあります。

小島大治郎 (こじま だいじろう)

上田小県の鉄道網を築いた実業家

安政 6 年～昭和 4 年 (1859～1929)



いもの 代々続く鑄物業を近代化

小島家は、戦国時代から常田で鑄物師屋を営み、江戸時代中期から当主は代々「大治郎」を名乗り、「鍋大」の屋号で親しまれてきました。ここで扱う大治郎は、正確には九代目小島大治郎ということになりますが、以下大治郎と略します。

大治郎は、17 才で家業を受け継ぐと、従来からの経営をあらため、明治という時代にふさわしく、近代的な合資会社小島鉄工所として発展させていきました。また、善光寺他多くのお寺の鐘も作成したと伝えられていますが、第二次世界大戦中の金属回収令によって、その多くが失われてしまっています。

でんき 上田温泉電軌の全線開通と交通網整備

大正 7 年 (1918) 、人々の強い願いで大屋～丸子間に鉄道が敷かれま



鉄道敷設の許可状

『夢と暮らしをのせて走る別所線』

上田小県近現代史研究会 2006 年刊

した。大治郎も、取締役に就任しました。その利便性を知った青木・塩田・別所の有力者たちも、「ぜひ自分たちの地域にも鉄道を」と願いました。しかし、鉄道敷設には莫大な資金が必要です。そこで彼らが頼ったのが、すでにいくつもの事業を成功させていた大治郎でした。

上田温泉電軌は、その社名のとおり、上田駅から青木村の田沢温

泉や沓掛温泉、別所温泉までを結ぶ路線として、大正10年（1921）に開通しました。なお、「軌」は、路面に敷かれた線路（軌道）を意味します。

大正15年には、さらに路線を延長して、下之郷と丸子を結ぶ西丸子線を開通させ、昭和3年（1928）には真田、^{そえひ}傍陽方面へと線路は伸びていきました。すでに大正14年には丸子鉄道も大屋から東上田まで延伸させていましたので、上田小県はほぼ全域が鉄道で結ばれるまでになりました。

しかし、この時期は大変な不況の時代でしたので、資金集めは大変でした。それでも開通させたのは、大治郎の「鉄道事業というものは、山に木を植えるようなものであり、すぐにできあがり、もうけたがるような考えではだめだ」という強い決意でした。

また、大治郎は社長に就任しましたが、「人の先頭に立って事業を起^{むほうしゅう}こす者は無報酬という覚悟でせねば」という言葉どおり、社長としての手当は受け取らなかつたといいます。さらに、特別な社長室は設けず、一般社員と同じ部屋で働き、机なども特別のものは備えませんでした。

公共事業の経営

大治郎は、鉄道会社の他にも上田蚕種、上田ガス、信濃電灯、田沢炭坑などいくつもの会社経営に関わりましたが、その多くは公共性の高いものでした。その理由は、「事業に失敗しても社会公共に尽くしたということであきらめがつく。うまくいけば世間のためになり、かつもうかる」という信念からでした。

また、私費で「小島育英資金」を設け、苦学の学生を何人も支え、人材の育成に努めました。これはその後、上田市の育英資金にその精神が受け継がれ今日に至っています。

晩年はキリスト教を信仰し、慈善事業にも尽くし、おだやかな最期を迎えたといいます。昭和32年（1957）には、上田城跡公園内に大治郎の業績を讃える頌徳碑が建立されました。

小菅武夫 (こすげ たけお)

人間愛の本願を達成した教育者
明治 40 年～昭和 4 年 (1907～1929)



大きな記念碑

上田橋南側の堤防上の道路を東へ進み、別所線の踏切を横切り、さらに東へ 50mほど行くと、右側に大きな白い塔が建っています。
「嗚呼小菅訓導」と書かれた小菅武夫の殉職記念碑で、千曲川を向いて建っています。

おぼれた児童を救う

昭和 4 年 (1929) 4 月 24 日、上田尋常高等小学校（現清明小学校・第二中学校）高等科 1 年（現在の中学校 1 年）春の遠足は、須川・鴻の巣方面を回り、小牧の四箇牧神社で解散しました。千曲川堤防上を帰る一部の児童が、千曲川に架けられた板を縦につなぎ合わせただけの幅 50 cm、長さ 50mほどの不完全な一本橋を渡ろうとしていました。

これを見た小菅は驚いて「狭い橋は危ないぞ」と止めようとしたが、その途端、一人の児童が足を踏み外して千曲川に落ちてしまいました。児童は両手で水面をたたきながら流されていきます。小菅は「今行くから待っておれ」と口走りながら、上着を脱いで川に飛び込み、よう

やく児童に追いつきましたが、児童が夢中で小菅の胸にしがみついたため、小菅は身体の自由を失い、なかなか岸に近づくことができませんでした。その後、近づいてきた同僚の恩田訓導に、小菅は「頼む」と言いながら児童を託すと、力尽きて水の中に沈んでいきました。

ただちに全校職員、市役所、警察、



遭難現場と遭難の時刻で
止まった遺品の懐中時計

消防、青年団などが搜索を始め、冷たい雨の中を徹夜で探しましたが小菅は見つからず、翌25日に学校の職員14名が水底を探り、小菅の遺体を探しあてました。小菅は極めて平安な面持ちであったといいます。小菅のおかげで児童は無事に助かりました。

5月4日、小菅の学校葬が行われ、全市民は各戸に弔旗を掲げて弔意を表しました。また、教育会や上田市をはじめ、文部大臣や長野県知事から表彰されました。さらに、上田市長、上田市小学校長、北信毎日、上田毎日、上田タイムスの3新聞社などが相談して、殉職記念碑の建設が企画され、小県上田教育部会が県下及び全国の各教育会に呼びかけて寄附金を募り、昭和5年11月遭難現場に殉職記念碑が建立されたのです。

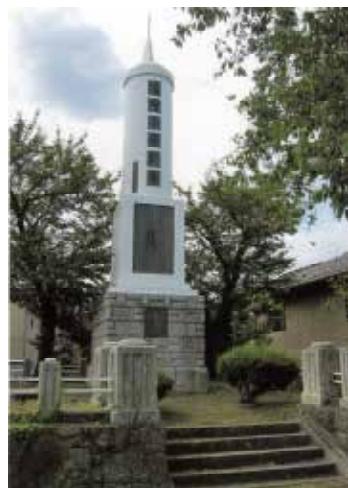
人間愛に満ちた教育者

小菅は、上田の木町に生まれました。家業を手伝いながら、小学校尋常科と高等科を優秀な成績・皆勤で卒業し、小諸商業学校第3学年に編入し、成績優良・精勤で卒業しました。東京第一銀行に入社し、書記となりましたが、病気のため銀行を退社しました。そして、教員になることを決意します。昭和4年3月願いがかない、上田尋常高等小学校の代用教員となり、商業科を担当し熱心に指導に取り組んでいました。その矢先の4月に殉職したのです。21歳でした。

真剣に考え続けたこと

小菅が体験や勉強を通して最後に到達したのは「本願」です。意味は「本当の愛は人間の本心の願いである。自分を愛するようすべてのものを愛しなさい」この本願を実行に移した気高く偉大な教育者です。

(本稿古写真は『小菅武夫君』復刻版 小県上田教育会 1988年刊より)



小菅訓導殉職記念碑

小山真夫 (こやま まさお)

『小県郡史』を編さんした郷土教育の実践者

明治 15 年～昭和 12 年 (1882～1937)



父真太郎の感化

真夫は、明治 15 年に上武石村（現上田市）の小山真太郎と恵寿の次男として生まれました。真太郎は、村の政治や学校建設に力を尽し、明治 21 年には蒸気機関を取り入れた製糸工場を設立しました。また、書や絵、剣道や華道にも親しみ、とりわけ国学と和歌に熱心で、武石の歴史や地誌・伝承などを記した『武石沿革史』を出版し、歌集を始め数十種の手書きの本を残しました。そんな父のもとで、真夫は幼い頃から歴史や伝承などに关心を深めて、知識と物事を見る眼を養いました。

藤澤直枝との出会い

小学校を卒業した真夫は、上田の中学校（現上田高校）に進学しました。当時、武石から中学校に進む子どもは非常に少なく、全学年で 5 人ほどでしたが、みな勉強熱心で知識欲の旺盛な生徒でした。彼らは下宿から学校に通い、月に一度ほど徒歩で武石に帰りました。

3 年生の時、上田中学に藤澤直枝が赴任してきました。藤澤は、後に『上田市史』を編さんする郷土の歴史研究に熱心で力のある先生でした。藤澤に連れられて城跡や古墳の調査や寺院の宝物の見学にでかけたり、授業の資料作りを手伝ったりと、ますます歴史の研究にのめり込んでいきました。中学卒業後は、明治 35 年（1902）に東京専門学校（現早稲田大学）に入学しましたが、半年ほどで退学して郷里に帰ってきました。

教育への情熱と学習資料の作成

郷里に帰った年の 12 月、真夫は藤澤の勧めで、中塙田小学校の代用教員となり、教育者としての第一歩を歩み始めました。翌年には難しい正教員の検定試験に合格し、情熱をもって教育にあたり、子どもたちに慕われました。

真夫は、中塙田小学校ののち、武石や丸子の小学校で教え、日々の授業を工夫するとともに、郷土学習や歴史学習のための地図や年表などの資料作りにも熱心に取り組み、各地の教育会や青年団から講演を頼まれるようになりました。こうした実績が評価されて、大正5年に小県郡長から『小県郡史』編さんという大事業を依頼されました。

また、父の残した蔵書や自ら集めた蔵書数百冊を「小山文庫」として村人に貸し出していましたが、それをそっくり上武石区に寄贈して「上武石文庫」が開設され、明治41年（1908）には上武石青年会の管理下に移されて、さらに蔵書の充実と利用が図られ、県下でも有数の文庫図書館となりました。

『小県郡史』の編さん

真夫の自宅の庭には、「朝夕に 我とわが身を励ましし その一言は I must do」と刻まれた歌碑があります。これは真夫が『小県郡史』を書くのに使った全ての筆を埋めた筆塚に立つ碑で、真夫の郡史編さんの覚悟と意気込みをよく示しています。

『小県郡史』は、6年の調査と研究を経て、「本篇」が大正11年（1922）に、「餘篇」が翌年に刊行されました、両篇ともに千頁を超える大作で、郡内のできごとを全国的な立場から考察し、統計を多く用いて証明するなど学問的水準は高く、民間の言い伝えなども多く取り入れるなどの特色を持っています。

郡史編さん中も、長野県史蹟名勝天然記念物調査委員として、多くの調査と報告を書き、退職後は考古学の研究も進めて論文を発表し、さらに人々の生活に根ざした子守唄や昔話の調査をして『小県民謡集』・『小県民譚集』を出版しました。

また、上田史談会や上田民俗研究会、考古学研究会なども作りましたが、武石村では青年会が開設した夜学で講義を行いました。

昭和12年、胃がんのため55年の生涯を閉じました。郡史編さんで調査した記録「小山真夫野帳」26冊は上田市の文化財に指定されています。

佐藤八郎右衛門 (さとう はちろうえもん)

蚕種業の功労者で初代長野市長

弘化 3 年～明治 42 年 (1846～1909)



青少年時代と均業会社

佐藤八郎右衛門は、小県郡上塩尻村（現上田市）の蚕種農家に、江戸時代末期の弘化 3 年に生まれました。幼名を勝蔵といいましたが、12 歳で父が亡くなり、翌年には火災で家財を失うという不幸にあいました。しかし、誠実で、母に孝行した八郎右衛門は家業の蚕種業に励み、事業を拡大して、明治 5 年（1872）には村の戸長（村長）となりました。

明治 6 年には上塩尻村に優良蚕種の製造を目指した県下初の会社組織である「均業会社」が設立され、人望のある八郎右衛門が社長に就任しました。この均業会社を最初として、明治 6 年から 7 年には上田小県地方に 25 社の蚕種会社が次々と設立され、明治 8 年にはこれらの会社が集まり「蚕種製造組合上田組合」を組織し、八郎右衛門は頭取になりました。組合では検査人を選挙で選び、組内を巡回して蚕種製造や養蚕を検査し、優良な蚕種や繭の製造に努力しました。

長野県蚕種業者の代表

明治 8 年には「蚕種製造組合会議局」が東京に開局され、蚕種製造上の問題が協議されるようになりました。八郎右衛門は長野県を代表して局議員になり、全国の幹事 10 名の一人にも選ばれました。会議では、八郎右衛門が豊富な知識にもとづき、蚕種の製造や改良について有効な意見を積極的に出し、東京蚕種取締所委員に選ばれました。

明治 19 年（1886）には「東京蚕種組合中央部」が設置されると、長野県の代表になり、あわせて長野県蚕糸業組合取締所副頭取に選ばれました。さらに明治 29 年には信濃蚕種業組合長になり、長野県の蚕種業発展のために大いに尽力しました。

長野県会議員から衆議院議員に

八郎右衛門は、政治の世界でも活躍しました。明治 11 年の県会の開設にあわせて県会議員に選ばれ、明治 25 年まで務めました。明治 19 年には県会議長に選出され、重責を果たしました。

明治 23 年には帝国議会が開かれ、初の衆議院議員選挙が実施され、八郎右衛門は小県郡・埴科郡はにしなから立候補しました。第 1 回目の総選挙ではわずかな票差で当選できませんでしたが、第 2 回、第 3 回の総選挙ではみごとに当選し、2 期にわたり衆議院議員として活躍しました。なかでも蚕種検査法や養蚕獎励法案などの立法化に力を尽くし、わが国の蚕糸業の発展のために寄与しました。

初代長野市長に就任

明治 30 年（1897）、長野町は県下で初の市制を施行し、長野市が生まれました。長野市会では内務大臣の命で選挙が行われ、県会議員や国会議員としての実績や蚕種業発展へ力を尽くした功績などから、八郎右衛門が初代の長野市長に選ばれました。

明治 32 年（1899）には、病気のために市長を退き、明治 35 年には長男に家督かとくを譲りました。晩年は詩文や囲碁しぶんなどをよく行い、いご 悠々自適ゆうゆうじてき の生活を送り、明治 42 年に 64 歳で亡くなりました。

柴崎高陽（しばさき こうよう）

山岳写真の先達

明治 35 年～平成 2 年（1902～1990）



夢を追い続けた写真少年

柴崎高陽（本名・英夫）は、小県郡殿城村下郷（現上田市）に生まれました。家は「高陽館」という屋号をもった蚕種製造業を営む農家で、父新一は、殿城村長や上田市助役などの要職を長年務めた人物でしたので、英夫少年は裕福な家庭環境の中で育てられました。

尋常小学校 3 年生の時、購読していた子ども向け月刊雑誌に載った写真機の広告を見て、親にねだって買ってもらったのが、写真とのかかわりでした。

大正 6 年、小県蚕業学校（現上田東高校）へ入学したものの、2 年生の時に健康を害してやむをえず休学しますが、この頃から、パール II 型などの当時流行したカメラを手に入れて、各地を撮り歩きました。プロの写真家を目指して美術学校への進学も考えましたが、許されず断念した経緯があります。しかし、写真家になろうという一念は、どうしても捨てきれず、独学で写真術を学んだのです。

スキーと山岳写真ひと筋

大正の末になると、アマチュアのカメラ熱が盛んになり、東京のアルス社から『カメラ』という写真雑誌も発刊されました。彼はこれらを手にして写真術を勉強し、また自宅に暗室をつくり、現像やプリントの実験を重ねたのです。大正 15 年（1926）には、自宅の蚕室をぶち抜いて、スタジオをつくり、写真館を開業しました。当初は営業が成り立ちませんでしたが、そんな折りオーストリア出身のスキー指導者シュナイダーが滑った菅平スキー場の宣伝写真の依頼が飛びこんできたのです。

以来、彼は雪の菅平・スキー写真へとのめり込んでいきました。昭和 10 年、山の親友でスキーの名手馬場 忠三郎と組んで、初の著書『スキー写真術』を世に出しました。

また、厳冬の雪山で撮影した作品の個展を、東京のデパートで開催したのもこの頃で、山岳写真家として注目されるようになりました。

信濃の祭り写真

戦後、柴崎は自著、共著含め 10 冊をこえる写真書を世に出しますが、その中には信濃の自然や祭りを被写体とした作品が多くなってきます。雪山とスキーに没頭した戦前の時代を経て、柴崎の撮影対象は伝統的な民俗行事等の世界へと移行してきます。厳冬期に多い信濃の祭りを、吹きさらしの祭り場での撮影に、精力的に挑む姿がみられるようになりました。

柴崎は、また長野県下のアマチュアカメラマンの育成にも意を注ぎました。昭和 13 年（1938）には、仲間と「上田写真クラブ」を立ち上げ、初代会長に就任し上田地域の写真の発展にも力を入れたのです。こうした写真文化活動の功績に対して、信毎文化賞（昭和 38 年）、上田市文化功労賞（昭和 44 年）、長野県知事より学術文化功労者表彰（昭和 47 年）、日本写真協会功労賞（昭和 51 年）等が贈られました。昭和 52 年には、勲五等瑞宝章^{すいごとうじゅしょう}を受章しました。

平成 2 年 6 月、愛用のカメラを枕元に置いて、88 歳の生涯を閉じました。



《上田城》（上田市所蔵）

柴崎虎五郎（しばさき とらごろう）

実業教育の実践者

万延元年～大正 15 年（1860～1926）



丸子学校と虎五郎

丸子学校の校長柴崎虎五郎は、後に依田社製糸の社長となる下村亀三郎を明治 18 年（1885）に東京の慶應義塾（現慶應義塾大学）へ送ります。亀三郎は丸子にもどって製糸場経営に成功し、依田社を日本有数の製糸場にしますが、福沢諭吉を尊敬していた虎五郎は実業教育に専念します。数多くの実業教育を実践していますが、次に二つの例をあげます。

校地でぶどうの栽培

虎五郎は、校地の避暑と実益収入をねらって、明治 19 年春学校にぶどうを植え、ぶどう棚を設置して上級生にその栽培の技術を学ばせました。ぶどう棚は夏の日除けに、実ったぶどうは販売、その結果を「明治 21 年より売却し、職員生徒は一粒たりとも食したる事なし。その収入は通信貯金となし、昨年に至りて 100 円の額に達したり」と書き残しています。

害虫の予防に益虫の繁殖を

丸子学校の生徒に「益虫図および説明書」を配った虎五郎は、「諸子よ、この図を持ち家庭に帰らば、炉端において親子だんらんの際、これが予防と駆除法を知得せよ。昆虫駆除は大人の手より諸子が愛らしき手と巧妙なる技はすこぶる利益」と話しています。

地域を起こす教育

虎五郎は明治 31 年（1898）冬「青年を校舎宿直室に集め、農家の副業

は旧智識ある機業を興すべき事」として、機織りを農村に起こして定着させようとしました。丸子村議会はこれに応じ、100円の補助金を出すことを決めます。虎五郎は群馬県の桐生から機織りの技術者を招き、丸子音楽隊（虎五郎が県下で初めて組織した金管音楽隊）を引き連れ村の中をまわり、老若男女を集めて講習会を開きました。この動きに賛同した小県郡長中島精一は500円の郡補助金を交付しています。

丸子村から始まった機業を長野県下に普及させるために、信濃教育会はその教師養成講習会を明治32年と33年に開設、32年には県下の2郡16か所で講習、750人あまりが受講しました。

信濃教育会では明治33年（1900）、柴崎虎五郎・保科百助（五無斎）・土谷政吉を染織講習会取調委員に任命し、東京工業学校教授柴田才一郎らを招いて、長野師範学校などで講習会を開きます。その後、南北佐久・小県・東筑摩・南北安曇・上下高井・上下水内の各郡で講習会が開かれ、受講者は2,864人、備え付けた機織り機は369台に達しました。

実業教育の実績を評価された虎五郎は、上伊那郡赤穂村長の要請を受けて村の学校に転任、赤穂農工補習学校・赤穂染織学校（現赤穂高校）を設立しました。

丸子町長となった虎五郎

その後、虎五郎はハワイのホノルル日本人学校で6年勤め、明治44年（1911）に帰国し、大正2年（1913）には丸子町長となります。教え子の依田社社長兼丸子町長の下村亀三郎が急死した後を任せられたのです。彼は大正7年まで町長を務めますが、この時期は依田社（社長は工藤善助）の最盛期と重なり、全国の商工業者はもとよりアメリカ絹業界などの視察もありました。発展を続ける町には「丸子劇場」が開業（大正6年）し、町民は松井須磨子の演劇などを楽しみました。

渋沢孝輔（しぶさわ たかすけ）

詩語の創造的追求に生涯をかけた詩人
昭和5年～平成10年（1930～1998）



詩への資質を育む

小説を書かない人を作家と呼ばないのと同様に、詩を書かない人を詩人と名づけることはできないと思います。ところが日本では、たとえば絶景を前にして感嘆のことばを発する人を「彼（彼女）はなかなかの詩人だ」などと言います。英語などでは「詩」と訳される元のことばを二つに区別しています。^{ポエジー} ^{poesy} と ^{ポエム} ^{poem}です。ポエジーは詩につながる感動の深さ、ポエムはその感動をことばで書き表した作品を言います。

渋沢孝輔は、ことばによってポエジーを追求したわが国における最高の現代詩人の一人です。ポエジーが豊かでないとポエムも豊かに実りません。それと同時に、ことばの運用が人一倍優れていないとポエムを作ることはできません。渋沢は信州の豊かな自然への慈眼^{じがん}と外国語習得への努力によって、自らの詩の資質を磨きました。

出自と業績

渋沢は昭和5年（1930）、小県郡長村横尾（現上田市真田町長）に養蚕農家の四男（末子）として生まれました。上田中学（現上田高校）を経て、昭和23年東京外事専門学校（現東京外国語大学）のフランス語科に入学、さらに東京大学大学院仏文専攻でフランス文学を研究しました。

課程修了後は明治大学等の教授として仏文学を講じながら「未成年」「×××」「オルフェ」「歴程」などの詩の同人誌によって詩や評論を書

きました。明大教授時代には在外研究員として渡仏し、フランス詩、ことに渋沢生涯のテーマであった19世紀の詩人、A・ランボーやC・ボードレール等の研究を深め、同時に象徴手法による、詩の根源を尋ねる渋沢独自の言語観にもとづく自らの詩を多く公表しました。特に平成4年の詩集『啼鳥四季

ていちょうしき

』は読売文学賞や芸術選奨文部大臣賞を受賞したほか、昭和55年の詩集『廻廊

かいろう

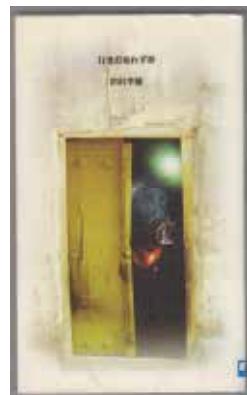
』では第10回高見順賞、同年の評論集『蒲原有明論

かんばらありあけ

』では第12回亀井勝一郎賞、さらに平成9年の『行き方知れず抄

はぎわらさくたろう

』では第5回萩原朔太郎賞をそれぞれ受賞するなど、渋沢の活躍はめざましく、平成7年には紫綬褒章を授与されました。



渋沢の望郷詩

渋沢は東京都国分寺市に家族とともに住んでいましたが、近所の公園をよく散歩しました。そこで目にする樹木や草花は、彼に生まれ故郷を思い出させました。昭和57年母まつが他界し、平成3年長兄の死去の頃から故郷追慕の思いは強くなつたようです。先述の『啼鳥四季

いたかうしき

』の中の一篇「その指す方は」は、彼独自の語彙と詩語で、信越線車窓の描写から仏都長野を経て雪の戸隠までの行程を書いたものですが、渋沢の望郷詩であるのと同時に、彼の詩業の頂点を示す一篇です。

渋沢は自らが猿飛佐助の末裔であることを疑わず、萩原朔太郎賞受賞の折の記念講演でもそのことを述べるなどユーモアを忘れない詩人でした。平成10年2月病（下咽喉がん）のため遂に帰らぬ人となりました。67歳でした。

『行き方知れず抄

』 渋沢孝輔著 思潮社

下村亀三郎（しもむら かめざぶろう）

上田地域に器械製糸を定着させる

慶応3年～大正2年（1867～1913）



明治5年（1872）、諏訪形村に上田地域初の器械製糸場が開かれました。しかし、ほどなく経営にいきづまり閉業します。同じころ上田町や長瀬村に、明治10年代には鹿教湯にも器械製糸場が開かれますが、いずれも長続きしませんでした。

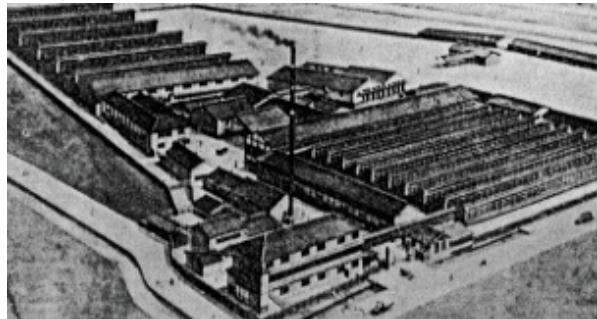
明治22年（1889）、下村亀三郎が丸子の依田川沿いに器械製糸場を開業、翌年には親戚や仲間に声をかけ製糸結社「依田社」を発足させます。一製糸場だけでは経営が困難であることを学んでいた亀三郎は、多くの製糸場が結社し繭の共同購入や生糸の品質を統一し共同販売するなどの方法で経営を安定させました。

青年教師から製糸場経営者へ

丸子学校で成績優秀だった亀三郎は、柴崎虎五郎校長の勧めで教師の代わりを務めました。しかし、正式な教師になりたいと願い、虎五郎らと相談して上京し、福沢諭吉の慶應義塾へ入学します。ところが1年余で体調をくずして丸子へ帰ることとなりました。塾長の福沢は「丸子へ帰ったら地域に役立つ産業を起こせ」と励ました。

そのころ、丸子地域では蚕種業と座繰り製糸業が盛んでしたが、隣の諏訪地域ではすでに器械製糸業が盛んになっていました。亀三郎は、蚕種業か製糸業か迷い、村の青年たちと議論を重ねました。「丸子には製糸で重要となる良質な水がある。大屋方面からは大量の繭が和田峠を越えて諏訪地域へ運ばれて生糸になり、丸子を通過し大屋へ戻って行く」という状況に着眼した亀三郎は「丸子に器械製糸場を開業したい。それは

福沢諭吉先生の恩に報いることにもなる」と考え、器械製糸を学ぶために和田峠を越え岡谷に通いました。武石や鹿教湯の製糸場からも学び、現在丸子文化会館の建つ地



依田社製糸工場

に水車を設置して、20人繰りの器械製糸場を開きました。

依田社の発展と丸子

依田社は、生糸価格の暴落や繭価の高騰で経営危機におちいる年もありました。しかし、アメリカからの注文に応える努力を続け、日清戦争後には経営が安定し、日露戦争後には日本有数の製糸結社になります。亀三郎は明治37年（1904）渡米し、セントルイス万国博覧会を視察した後、アメリカの生糸需要を調べて帰国、生糸の改良に取り組みます。その結果、明治末から大正初めにかけて依田社は全国4位の生糸出荷量を誇る製糸結社となりました。教師を務めたことがある亀三郎は教育にも力を入れ、明治41年の丸子農商学校（現丸子修学館高校）設立にも尽力しました。

大正元年（1912）、依田社の発展により丸子村は町となり、町長に亀三郎が就任しました。町の発展はめざましく、呉服・菓子・下駄・小間物・化粧品など、女工さん向けの店が建ち並びました。銭湯（お風呂屋さん）も数多く建ち、仕事帰りの人々がからだを休めました。繭や生糸の取引やそのほかの商売のために全国から人が集まるようになり、旅館も増え、町はにぎわいました。

町長と社長の仕事が重なり多忙な毎日に耐えきれなくなったのでしょうか、亀三郎は体調をくずし、大正2年、45歳の若さで亡くなりました。

真保正子（しんぽ まさこ）

第10回ロサンゼルスオリンピック槍投げ4位入賞
大正2年～平成7年（1913～1995）



「ずばぬけた投力を發揮した少女」

正子は、現在の上田市新田で真保仁作の次女として生まれました。お父さんは建築業でとても大きな人でした。正子はお父さんに似て子どもの時から体が大きく、力も強くて小学校当時流行っていたドッジボールは、正子の入ったチームがよく勝ちました。やがて上田高等女学校（現上田染谷丘高校）へ入学。2年生で北信地区の陸上競技会に出場しました。走・跳・投どれもよい成績を収め、卒業までスプリンターとして活躍しました。

昭和5年（1930）、日本女子体育専門学校（現日本女子体育大学）へ入学しました。このころ人見絹枝（ひとみきぬえ）（1907年生まれ）が先輩として活躍しており、憧れの的でした。人見は数々の外国の競技会で優勝しており、昭和3年（1928）の第9回アムステルダムオリンピック大会では、800m走で2位となり、日本女性初の銀メダリストになっていました。正子はいろいろな競技会に出場しましたが、人見の跳躍に圧倒されてしまい、なかなかよい成績が出ませんでした。そんな頃、観戦にきていた小学校時代の恩師寺島先生から「君は投擲専門にした方がよい。」と助言され、槍投げに専念することを決意しました。

正子は左利きでしたので数少ない左投型選手でした。一生懸命練習し、昭和6年（1931）全日本陸上競技選手権大会では、人見選手の持つ槍投げ日本記録を破ることができました。

「オリンピックに出場して入賞」

昭和7年（1932）正子は専門学校を卒業し、大阪の泉尾高等女学校（現泉尾高校）へ就職しました。この年に行われたオリンピック予選会を楽に通過し、第10回ロサンゼルスオリンピック大会へ参加できました。こ

のころの選手たちは、オリンピック開催国まで船で 2 週間以上かけて行きました。船の中で正子は毎日槍投げの練習をしました。それは槍の後尾に 40m の紐をつけ、海に向かって投げるという独特のものでした。大会直前の練習では

40.5m を記録し、大会当日も 39.7m を記録しました。メダルにはわずかに届きませんでしたが、堂々の 4 位に入賞しました。

帰国してからは各地で歓迎を受けましたが、9月 14 日に上田へ帰ってきたときは、市長をはじめ大勢の市民の歓迎を受け、正子もとりわけ嬉しかったようです。

スポーツの指導者として活躍

その後ポーランドであった大会では 40.32m の日本新記録を樹立しています。また、スポーツの指導者として、大阪を中心に活躍し、大阪第二師範学校（現大阪教育大学）助教授になりました。

昭和 21 年（1946）第 1 回国民体育大会で優勝。その後、大阪府教育委員会保健体育課指導主事として社会体育の推進に努めます。やがて大谷女子大学（現大阪大谷大学）教授となり、後輩を育てました。また日本女子体育研修会館の建設にも全力を尽くしました。昭和 56 年（1981）に定年退職し、昭和 60 年（1985）には、長年の功績により勲 5 等宝冠章ほうかんしょうを受章しました。その後老人ホームの理事を務め、フォークダンスの指導をします。大阪フォークダンス協会の設立にも尽力し、福祉方面でも活躍しました。

正子は、身長 164 cm・体重 60 kg。当時の日本女性としては大きい方でしたが、世界の中では小さな方でした。しかし、たぐいまれな技術力と集中力で世界のトップ選手と渡り合ってきました。平成 7 年（1995）12 月 19 日、82 歳で亡くなりました。



『写真集 上田の百年』信濃路 1976 年刊

高桑勝雄 (たかくわ かつお)

アマチュア写真家の指導者

明治 16 年～昭和 30 年 (1883～1955)



高桑勝雄は、上田町馬場町の高桑信吾の長男として生まれました。父親は上田尋常小学校の2代目校長在職中に44歳という若さで病死したため、勝雄は上田中学校（現上田高校）を中退し、家計を助けるために郵便局に就職しました。彼が写真に興味を持ったのはこの頃からで、外国の写真書物等から独学で知識を吸収したといいます。

写真誌の編集に携わる

大正元年、29歳の時に上京し、当時写真の老舗として知られた小西六本店の編集部員として入社しました。高桑はここで、アマチュア写真家を対象とした隔月誌『写真の趣味』という雑誌の編集に主として携わり、アマチュアの写真指導者としての活動を開始したのです。



写真雑誌『カメラ』

その後、同じ写真関係の出版社であるアルスに移り、やはりアマチュア向きの『フィルム写真術』など、いくつか写真誌の編集を手がけました。これらの書籍は、写真機・レンズ・フィルムのこと、また撮影の方法・現像・引き伸ばしなど写真全般にわたり、分かりやすく解説されていました。当時、まだ適当な写真指導書が少なかったので、これらの書籍はたちまち評判となり、大変な売れ行きで版を重ねました。

また、大正 10 年 4 月には、日本で初めて

といわれるアマチュア向きの月刊写真雑誌『カメラ』が創刊されましたが、高桑はその主筆として関わったのです。さらに『写真五十講』(大正11年刊)、『写真問答』(大正12年刊)、『写真薬品の知識』(昭和5年刊)など、アマチュア写真家向けの書籍を精力的に出版しました。

しかし、昭和16年頃より戦時体制が強化されると、写真の出版界も統廃合という事態が起こってきたため、高桑はこれを機に若い編集者にバトンタッチして引退を決意したのです。

国際写真作家協会の設立

戦後、高桑は写真を通じて国際親善に寄与しようと、「国際写真作家協会」の設立を全国の写真作家に呼びかけました。写真家の国際舞台への進出を助ける活動を積極的に展開したのです。日本人の作品が3年連続で権威あるパリの国際サロンで優勝したり、アメリカの世界最大の国際誌コンテストで入賞したりするなど、数々の成果をあげることが出来ました。

長野県では、昭和26年に設立された「長野県写真連盟」の相談役として、また「県写真サロン」の審査長や「上田写真クラブ」の顧問などを務め、アマチュア写真家の指導を続けました。

後年、軽い脳出血で体調を崩しましたが、その不自由な身をおしてまで写真の指導に当たったのです。こうした写真界における長年の功績が認められ、昭和29年6月1日の「写真の日」に、日本写真家協会から功労者として表彰されました。

高桑は昭和30年2月5日、東京吉祥寺の自宅で72歳の生涯を閉じ、上田市鍛冶町の本陽寺に葬られました。

滝澤助右衛門 (たきざわ すけえもん)

現在も生きる善意の史料と図書

明治 17 年～昭和 9 年 (1884～1934)



聴覚の障がいを背負って

滝澤助右衛門は、江戸時代から原町で問屋（宿場の責任者で荷物の運送や人足の手配を行う）を務めていた滝澤家の 12 代目として、明治 17 年に生まれました。滝澤家は代々「助右衛門」を名乗り、父は上田銀行や運送業を経営する資産家でした。幼いころから将来を期待され、上田中学校（現上田高校）に進みましたが、耳の病気になりやむなく退学し、上京して耳の治療を受けながら大成中学校を卒業しました。その後、高等商業学校（現一橋大学）の入学試験を受けましたが、英会話の試験で聞き取りができず、合格はできませんでした。

家業を継いで経営者の道へ

帰郷後、父親の元で企業経営と財務について手ほどきを受けながら、運送倉庫業の停車場支店詰めとなり、日計表やバランスシートを作ったり、簿記をつけたりして経営の合理化に努め、経営者としての腕を磨いていきました。

父の死後、明治 45 年に上田銀行に招かれて常務に就き、ここでも細密周到な注意を払い銀行経営にあたりましたが、折からの経済不況や昭和 4 年の大恐慌^{だいきょうこう}に遭遇して、昭和 5 年取引中止に追い込まれ、その整理を行いました。

先祖や住民への感謝

助右衛門は、幼いころから情に厚く人を大事にしており、また、先祖を敬い、祀りを欠かしたこと�이ありませんでした。先祖の 2 代目助右衛門は、約 400 年前に本原村下原（現上田市真田町本原）から上田城下へ移住した人で、そのため滝澤家の墓地は下原にありますが、いつも手入れが行き届いていました。

また、助右衛門は滝澤家の発祥の地である下原の人たちを大切にしていました。大正 13 年に上田温泉電軌株式会社が北東線を敷設した時は、田畠が少なく収入の少ない下原区民のために、割り当てられた全株券を助右衛門が購入し、下原区に寄附しました。

今も生きる史料と図書

代々原町の問屋を務めていた滝澤家には、寛文 3 年（1663）から明治 2 年（1869）までの 206 年間にわたる 157 冊もの日記が大切に受け継がれてきました。上田宿での日々の出来事や藩からの通達などを記録した日記は『問屋日記』と呼ばれ、江戸時代の上田城下町の様子を知る上で絶対に欠かすことのできない貴重な史料です。助右衛門は、先祖から受け継いだ『問屋日記』や所蔵する古文書を藤澤直枝が編さんしていた『上田市史』（昭和 15 年刊）のために公開しました。『問屋日記』は昭和 44 年に上田市の文化財に指定され、現在は上田市立博物館に寄託・保管されています。

一方、出版物にも気を配り、わが国の重要な古文書を編さんした『大日本史料』『大日本古文書』などの高価な図書を順次購入し、上田中学校校友会文庫に寄附しました。そして、昭和 7 年、より幅広く市民が閲覧できるよう、所管を上田市立図書館に移すことになりました。これらの図書は現在でも上田市立上田図書館に保管されており、研究者や市民に広く利用されています。



原町『問屋日記』
(上田市立博物館保管)



『大日本史料』『大日本古文書』
(上田市立上田図書館所蔵)

中村直人 (なかむら なおんど)

彫刻家から国際的な画家になった異例な芸術家

明治 38 年～昭和 56 年 (1905～1981)



新進気鋭の彫刻家へ

中村直人は、小県郡神川村 (現上田市) で、かんがわむら ようさん 養蚕農家の三男として生まれました。神川は大正時代の中頃に、山本鼎かなえ が提唱した「農民美術運動」と「児童自由画教育」の発祥の地です。そこで、直人はリアルタイムに二つの運動に触れ、上田の美術が大きく変化する渦中で小学校時代を過ごしました。

15 歳の時、鼎の世話を上京した直人は、木彫家・吉田白嶺はくれい の木心社に入門。木彫の手ほどきを受け、デッサンを習い、自己の彫刻表現を高めていきました。大正 14 年、直人 21 歳の時には、明治時代の創設で国内屈指の美術団体・日本美術院いんじゅん (院展) で初入選を果すと、大正 15 年には日本美術院賞を受賞し、日本の彫刻界の新風として頭角を現し始めました。そして昭和 10 年、院展内の最上位の地位に当たる同人に推挙され、日本を代表する彫刻家に上りつめたのです。



《《町娘 (仮)》
(1940 年代)}

従軍作家の道を歩む

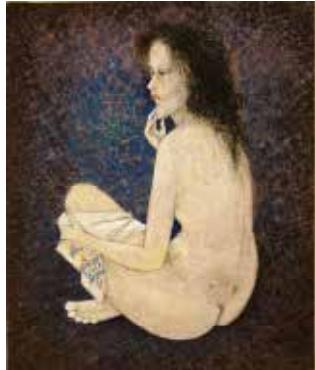
直人は日中戦争が勃発した昭和 12 年、陸軍省に働きかけ従軍を果たします。戦地に赴おもむ き通信員として現地を描きとめる仕事や、軍の依頼で兵士をモデルとした彫刻を制作する仕事などに携わりました。しかし、第二次世界大戦の終戦後、美術界における戦争協力者への批判が高まり、直人も批判を受ける一人となりました。中でも、洋画家の藤田嗣治つぐはる は最も戦争責任を問われることとなりましたが、直人が藤田との親交を深めていったのもこの頃です。

フランスに渡り画家へ転身

戦後間もない時期の直人は、新日本美術会の創設に参加し、各種展覧会への出品を続けていました。日本の彫刻界を担う作家の一人として期待されていたのです。

しかし、藤田嗣治からの強い勧めもあって、若い頃からの夢だったフランス留学実現のため、47歳まで日本で築き上げた彫刻家としての地位も、安定した生活もすべて捨て、一家でパリへ移り住みました。

パリに渡った直人は、しばらくホテル住まいをしていましたが、そこでは思うように彫刻の制作ができず、次第に絵を描くようになりました。昭和28年、パリの画廊で開いた個展では、直人の描いた油絵やグアッシュ（水彩画）が大変な評判となり、フランスの新聞で「ナオンド・ナカムラはパリを制服にやってきた」と絶賛されたのです。画家へ見事な変身を遂げた直人は、その後もヨーロッパ各地の個展で大成功を収めました。



《裸婦》(パリ時代)

帰国後も画家として活躍

パリ在住12年の間に、国際的な画家としての地位を築いた直人は、昭和39年に日本へ帰国。東京・銀座で開催した滯仏絵画展も好評で、その後、大正時代の始めに結成され今日まで続く美術団体・二科会に誘われ、日本の画壇に画家として復帰しました。二科会では、努力賞や青児賞を受賞し、昭和55年には最高賞である内閣総理大臣賞を受賞しています。

美術界では、彫刻家から画家になることは非常に稀で、しかも、ヨーロッパで高い評価を受けた日本人作家もそれほど多くありません。西洋東洋の枠を越え、個性溢れる作品で高い評価を受けた直人も昭和56年、76歳の生涯を閉じました。

中村 實 (なかむら みのる)

農民美術の発展に一生をささげた
明治 27 年～昭和 52 年 (1894～1977)



作家志望の青年時代

中村實は、神川村黒坪（現上田市国分）に生まれました。若いころから読書が好きで、ロシアの文学者・トルストイや、有島武郎、徳富蘆花などの作品を好んで読む青年時代を送りました。實は農業と養蚕を行なう家で育ちましたが、日々の仕事をこなしつつも、一方では作家になるという夢を心に持ち続けていたのでした。

山本 鼎に出会って動き出した運命

そんな實の人生は、大屋に両親が住んでいた画家の山本鼎と出会ったことで大きく動き出します。實が 25 才の時でした。フランス留学から帰ってきた鼎は、大正 8 年 (1919) 春、神川小学校で児童自由画展を開くことを計画し、實はそのお手伝いをしていました。その時、「今年の 12 月から農民美術というものをやるのだけれど、やってみませんか」と、鼎から誘われたのです。農家である現実と、作家になる夢の間で悩んでいた實に、新しい人生の道が見えてきました。

農民美術に打ち込む

農民美術とは「農家の人々が作った手作りの美術的な工芸品」という意味で、山本鼎が留学の帰り道のロシアで手にした工芸品をヒントに名づけたものです。大正 8 年 (1919) 12 月、實は 3 人の仲間と一緒に、鼎の始めた農民美術練習所に入り、木片人形や白樺巻などの木製品を作り始めました。それらの作品は、東京や大阪のデパートに並べられ、そのほとんどが売り切れたのです。冬の間のこの講習を 3



日本農民美術研究所
(上田市大屋)

年受けた後、實は練習所と一緒に過ごした仲間たちと農民美術生産組合をつくり、その組合長になりました。農民美術の講習会が日本各地で開かれるようになると、技術を身につけた實自身が先生となり、講習会へ参加する人々に農民美術の作り方を教えて歩きました。また、農民美術の仕事の一方で、木彫の芸術作品をつくり、日本美術院展覽會（院展）^{ほんびじゅぎょういんでんらんかい}で入選をしています。實の腕前は確かなものだったのです。

山本鼎記念館の生みの親

昭和 21 年 (1946)、實の人生に大きな影響を与えた山本鼎が亡くなりました。實は自転車に乗って鼎の入院している馬場町^{ばばんちょう}の病院に急ぎましたが、間に合いませんでした。上田周辺の農民美術の制作は、戦争のため中断していましたが、鼎が亡くなつたことで、實は農民美術をもう一度盛んにして、しっかりと後世に伝えていこうと仕事に励みます。昭和 24 年 (1949)、實は仲間とともに長野県農民美術連合会をつくり、その後長い間、若い世代の育成に力を注ぎました。その一方、實は山本鼎の偉業を伝え、農民美術の拠点とするため、昭和 33 年 (1958) に「山本鼎記念館」の建設を計画します。實は同志とともに、記念館建設のための募金や寄付をお願いしてまわり、東京などに住む山本鼎の友人であった芸術家たちの協力も得て、4 年後の昭和 37 年 (1962)、山本鼎記念館は上田城跡公園内に開館しました（現上田市立博物館別館）。實は記念館の初代館長として、山本鼎が始めた児童自由画と農民美術の運動を、社会に広める役割を果たしたのです。

最後のことば

農民美術に一生をささげた中村實は、昭和 52 年 (1977) 83 歳で亡くなりました。最後の言葉は「農民美術発祥^{はっしょう}の地に山本先生の碑^{いしぶみ}を建ててくれ」だったといいます。それから 2 年後、神川小学校に山本鼎を顕彰^{けんしょう}する石碑が建てられました。現在でもその碑は、神川小学校の子どもたちを見守っています。



《田植の娘》
院展入選作
(昭和 7 年)

成沢玲川 (なるさわ れいせん)

写真ジャーナリストの先駆者

明治 10 年～昭和 37 年 (1877～1962)



写真ジャーナリストとして、また評論家としても活躍した成沢玲川は、上田の原町で代々 吳服商を営み後に薬種商も経営した金兵衛の長男として生まれました。幼名を金彌といい、9歳で金兵衛を襲名しました。「玲川」はペンネームです。

大志を抱いて渡米

家業修業のため、上田中学（現上田高校）を中退し上京しましたが、わずかで上田に帰り、原町の生家の近くに「百合舎」という書店を始めたのです。しかし、考えるところがあり、書店を閉じて渡米することを決意したのです。

明治 39 年、28 歳の時に渡米し、オレゴン州ポートランドで「おうしうう 央州日報」という名前の邦字新聞を発行する仕事に携わりました。写真技術を習得したのはこの頃で、写真コンテストなどにも出品し、時々上位に入賞したことです。また、アメリカで活躍している日本人の生活を丹念に取材し、フィルムに収める仕事も手がけました。彼は大正 2 年に帰国しますが、この記録フィルムを 12 巻にまとめ、各地で上映して好評を博しました。

写真雑誌初代編集長・日本放送協会報道部長

大正 7 年、朝日新聞東京本社に入社し、写真ジャーナリストとしての第一歩を踏みだしました。関東大震災の起った大正 12 年に、わが国における写真誌の草分け的存在のグラフ誌『アサヒグラフ』が創刊されました。彼はその初代編集長として、新境地を開拓したのです。また、

大正 15 年には写真雑誌『アサヒカメラ』が発刊されましたが、やはり編集長として関わりました。さらに日本で初めての『写真年鑑』の刊行にも携わりました。昭和 2 年には、同社の企画部長に昇進しましたが、その間にも、「国際写真サロン」の創設や『アサヒ写真叢書』『廣告写真集』『映画年鑑』など、いくつかの刊行物の企画担当をしたのです。さらに朝日新聞社を定年退職後は、活動の場を放送界に移し、日本放送協会（NHK）の報道部長として、報道放送の改善等に敏腕をふるったのです。



『アサヒグラフ』
創刊号（大正 12 年）

日本写真協会の設立

写真を通じて国際親善の推進、文化発展に寄与することを目的とした「日本写真協会」が、昭和 27 年に設立されました。成沢はこの協会設立にも当初から関与し、専務理事に推され、老齢もいとわず 10 年もの長きにわたり、協会発展のために努力を続けたのです。

成沢の提案した「日本写真 100 年史展」が、昭和 37 年 9 月 16 日から 10 月 14 日まで、東京上野の国立科学博物館で盛大に開催されましたが、病気のため、成沢はこの展覧会を見ることなく、この年に 84 歳の生涯を閉じました。日本写真協会は、菩提寺である上田市横町の日輪寺墓地に「成沢玲川顕頌碑」を建立し、写真界に尽くした偉大な功績を讃えています。



成沢玲川顕頌碑（日輪寺）

新田 潤 (にった じゅん)

上田の街と人々を描く

明治 37 年～昭和 53 年 (1904-1978)



新田潤生誕之地

新田潤は、本名を半田祐一といい、明治 37 年 7 月、原町の通称電信小路はんだゆういちに父仲太郎、母くにの次男として生まれました。母は曾祖父半山が佐久間象山から製法を伝授されたという目薬「チンマリ水」を調合販売していました。

新田潤の生家は「十世帯ほどが住まう通称電信小路の中程の二階建三軒長屋の隅っこ」で、小路の名前は「原町からこの小路に入る左側に西洋風二階造りの洋館」があり、この場所が最初の電信局、その後官舎となつたことから、電信小路と呼ばれていました。さらに新田潤生家跡の向かいには「電信食堂」があり、後年たまたま訪れた新田潤がその食堂からかつての我が家を眺めるシーンがあり、その頃には刀剣研磨所けんまに変わっていたそうです。

新田潤は、大正 11 年に上田中学校（現・上田高校）を卒業するまで、ここに住み、その後旧制浦和高等学校を経て、東京帝国大学英文科へ進みました。在学中に『文芸交錯』を創刊し文学活動を始め、同期の高見順たかみじゅん（本名高間芳雄）と親友になり、新田・高見ともに、同じ読み方の《潤》《順》を意識的にペンネームとして使っています。

作家としての歩み

新田潤は昭和 5 年東京帝国大学を卒業したものの、不況の最中で就職口がなく、翌年やっと京橋図書館の臨時職員に採用され、貧しい生活の中で作家活動を始めます。

昭和 8 年『日暦』に「煙管きせる」を発表し、その後「片意地な町」「映画館すうせい」のある町を相次いで発表し、時代の趨勢ぶんぜんを描いた作品として文壇の注

目を集めました。これらの作品には、大正から昭和へと時代が移り変わっていく町と人々が少しコミカルに描かれています。

「煙管」は上田の町を舞台に、時代について行けない馬車屋と鍛冶屋の話ですが、ここには背景にまだ成熟していない時代と官憲との関わりがリアルに描き出され、その媒体が馬車屋の年寄りが打った煙管にあるという、ユーモラスな中にも哀しい時代背景を描き出しているところに新田の作品らしさが顕あらわれています。この作品によって、新田潤は作家の道を歩み始めたといえるでしょう。

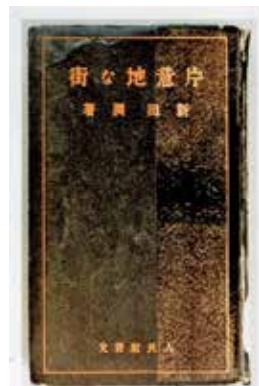
「この町の人々にはどこか片意地といった様なところがある」（「片意地な町」）

「この町には 2 つの映画常設館と 2 つの芝居小屋がある…」（「映画館のある町」）

都市部にあこがれ、文化という言葉に弱い町の人々が登場する 2 作は、新しい文化と地方の人々との文化論であるともいえます。高見順は新田を「私小説的伝統の否定された文学的局面から進み出た所の新人」などと評し、人となりについては、「文学的にも人間的にももっともよく英文学のエッセンスを身につけた紳士」と高く評価しています。

近年、新田潤作品は集約され、郷土出版社から『新田潤全集』として刊行されました。新田潤の母校上田高校には、新田潤の蔵書 820 冊、自画像などが寄贈され、「新田文庫」として開館しています。地元ではなかなか見学できないため、池波正太郎真田太平記館でほぼ全蔵書を企画展示し、多くの反響を呼びました。

新田潤は昭和 42 年、母校上田高校同窓会館で「高見順と昭和文学」の講演を行い、翌年には『わが青春の仲間たち』を出版しましたが、結核を発病し、昭和 53 年 5 月、74 歳の生涯を閉じました。



新田潤『片意地な町』

八田たつよ（はった たつよ）

女性の地位向上や社会福祉に尽くした
明治 29 年～昭和 58 年（1896～1983）



八田たつよは、明治 29 年（1896）小県郡傍陽村大庭（現上田市）山田逸次郎を父に 8 人兄弟の長女として生まれました。姉としての自覚からか子どもの頃からしっかり者でした。

松本師範学校を卒業後、教師となって初めて赴任した先は、下水内郡永田小学校（現中野市）でした。そこで同僚である八田忠敏と出会い、同じ道を行く者同志が理想とする教育に向上心を磨くなか、結婚をしました。小学校 17 年間、青年学校の指導を 5 年間務め、昭和 20 年に上田市西脇（現常盤城）へ戻ってきました。

戦争が終りようやく平和が訪れていました。新しい時代は、民主主義や男女平等を掲げた動きが押し寄せ、日本は新しく生まれ変わろうしていましたが、世の中は不安定な状況でした。

昭和 20 年 12 月、女性にも初めて選挙権が認められることになり、八田にとっても新しい出発でした。戦前からあった婦人活動に参加して次第に頭角を現わしていきます。

自治会運営には女性は参加しないという古い慣習を改め、男女が協力し合う地域づくりを提案し、実行に移していきました。

昭和 23 年上田市は、上田公園内の公会堂を公民館としました。公民館長は、市長の井上柳梧が兼務しています。公民館委員に八田も選ばれ、活動の組み立てをつくりました。その後、公民館運営審議会制度が出来

て 20 人の委員が選出されました。その中で女性は八田を入れて 5 人でした。この時代「七人の侍」といわれ活躍した女性リーダーの面々に八田も名を連ねていました。

男女が補い合って共に生きる社会へ向けて、行政は市長の諮問機関として「婦人専門委員」を設置し、婦人問題や福祉への意見を求めて、積極的に発言の機会をつくる配慮をしました。

昭和 27 年、上田市連合婦人会長に選ばれた八田は、婦人会活動の範囲を次第に広げ、社会問題にもかかわるようになってきました。長い間歴史の底辺にある売春で働く女性たちの解放に向けて、上田市でも売春禁止法制定促進東信大会が開かれ、八田も先頭に立った一人でした。また、原水爆禁止を訴える運動の結成大会がありましたが、八田は副委員長をつとめました。

戦後第一回目の市議会選挙で、花岡みよしが初の女性議員として当選し、二期の実績を残しましたが、三期目は出馬しないことになり、婦人団体から候補者を 3 人立てました。八田もその中の 1 人でした。一挙に 3 人では苦戦するのではと心配する声でしたが、八田と滝沢ゆきが当選しました。

長野市で婦人参政十周年記念式が開催され出席した八田は「婦人参政権は大正時代からの婦人運動でやっと得られたもの、女の手で獲得したもので与えられたものではない婦人議員の活躍はこれからだ」と語っています。今後、婦人議員を増やすために各団体の連絡を緊密にしなければと周囲に呼びかけたのがきっかけで、昭和 33 年に市内婦人団体で構成される「婦人団体連絡協議会（婦団連）」は 16 の団体が加入して発足しました。また、昭和 48 年にはかねて念願であった『戦後の上田女性史』を八田が発行人となり婦団連事業として発刊しました。

花岡みよし（はなおか みよし）

女性初の市議会議員として活躍したリーダー

明治 25 年～昭和 57 年（1892～1982）



商いを知る

花岡みよしは、明治 25 年（1892）鍛冶町に生まれました。父は早くに亡くなり、3人の子どもをかかえた母は暮らしを立てるために小さな雑貨屋を開きました。

母とともに商いの心得もなく始めた仕事の不安は、まず品揃えの難しさでした。売れない心配と買ってもらえた喜びの繰り返しから、今必要なものは何かの判断を身につけていきました。

商いの見通しがつくようになった頃、密かに抱いていた「もっと勉強がしたい」という大きな夢が捨てきれず、挑戦してみると日本女子大学を受験しました。やがてうれしい合格通知が届いたのですが、母に相談もしないで入学もしませんでした。秘密の夢を乗り越えた時、もつと店を大きくしたいという思いが強くなり、昭和 15 年（1940）には 40 名の店員を雇う花岡商店（現（株）はなおか）の基礎を築いたのです。

市議会議員への道

長かった戦争も終わり、女性の積年の願いであった婦人の参政権が認められ、男女平等も法制化され、新しい時代の風は古い風習を次々に破っていました。

昭和 21 年（1946）の総選挙は女性の初参加で行われ、39名という驚異的な女性議員の誕生となりました。女性の政治への進出は地方へも波及し、女性議員を出そうという機運が上田でも高まりました。翌 22 年（1947）の戦後初の市議会議員選挙の候補に何人かの名前があがり、婦人団体活動で長くリーダーを経験していたみよしと金子ふじの二人が候補者に選ばれました。激しい選挙戦の末、みよしが当選し、上田市初の女性市会議員が誕生しました。

みよしは議員として、生活苦の未亡人や痛手を負った婦人たちに行政が手を貸す場所でもある「婦人相談所」を開設し、生活改善など女性の視点での提言や活動を続けました。

昭和 26 年（1951）の二期目の選挙でもみよしは当選して女性の議席を守りました。また、議会では民生や文教の常任委員や委員長も務めました。

婦人の社会参加の促進

昭和 30 年（1955）、みよしたちは女性が自由に使える場所がほしいと当時の水野市長に働きかけ、消防署（大手）の一部を婦人団体のために無償で貸与してもらい「婦人会館」として自主管理が認められました。開館式は婦人週間（現女性週間）が始まった日に行われ、みよしは利用団体で組織した会館管理委員会の委員長になりました。以降、多くの婦人団体がここを拠点として利用し、活動することができるようになりました。この年の市議会議員選挙で、みよしは立候補を辞退し、八田たつよと瀧沢ゆきの二人がみよしの後継者として議員に当選しました。

また、家庭裁判所が身近なものになり調停委員制度が採用されると、みよしは初の調定委員になりました。みよしは上田裁判所の村岡判事の指導で民事裁判の模擬法廷を開いたり、婦人の地位向上を図るための討論会をしたり、積極的に活動を続けました。

地元の上鍛冶町自治会では、婦人だけの衛生班を結成し蠅^{はえ}や蚊^かの駆除、側溝の定期清掃、食品衛生監視活動などを行い、地域の環境や保健衛生活動にも取り組みました。

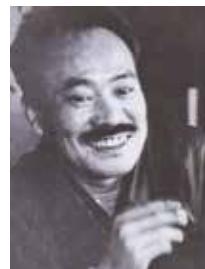
戦後の社会の急激な変化のなかで女性が認められ、活動していくためには、個々の努力はもちろんのこと、差別や偏見を無くしていこうとする社会全体の努力と女性自身が地位の向上のために社会的視野を広げていくことが大切です。

みよしは古い時代と新しい時代の挟間を越えて、明治から大正、昭和とリーダーを務め続け、強くしなやかな人生を送った人でした。

林 倭衛 (はやし しづえ)

近代美術史に名前が残る洋画家

明治 28 年～昭和 20 年 (1895～1945)



父の事業失敗で孤独な日々

林倭衛は、明治 28 年、現在の上田市常磐城に生まれました。旧士族出身の父は、倭衛が小学校在学中に製糸工場の経営に失敗し、明治 40 年春、倭衛と弟を親戚に預け、夜逃げ同然に東京へと出てしまいました。倭衛が預けられた親戚の家は、上田駅に近い北天神町で、それまでの友人たちからも離れてしまい、さびしい日々を送りました。

約 1 年の後、ようやく東京の父母のもとに引き取られはしたもの、失敗を繰り返す父に対して、倭衛は激しく不信感を覚えていくのでした。

水彩画研究所の夜間部で学ぶ

明治 43 年、印刷会社に勤務するようになった倭衛は、翌年、会社近くの水彩画研究所の夜間部に入り、絵画を学びました。明るく、旺盛な好奇心のままに、美術関係の友人を増やしていった倭衛ですが、その矢先、せんげもとまろ近くに住む詩人・千家元暦によって自由詩の世界を知ることになり、詩人の道を歩むのか、絵の世界へ進むのか、未来への关心が膨らんでいきました。

そして、まさに日本が大正デモクラシーへと進んでゆくこの時期に、社会改革を目指す近代思想に大きな刺激を受け、社会運動に興味を持った倭衛は、アナキスト（無政府主義者）やサンジカリスト（労働組合主義者）の仲間をつくっていったのです。

二科展での入賞と撤去命令

その頃、画壇^{がだん}では新たな風潮が巻き起こり、今まで活動が続いている美術団体・二科会^{にかかい}が立ち上がり^{ありしまいいくま}ました。同会の有島生馬に認められた

倭衛は、画家としての才能が開花し、大正5年の二科展にロシアの思想家バクーニンの写真像を元にして描いた《サンジカリスト》を出品して入賞を果たします。

しかし、大正8年にアーナキスト・大杉栄をモデルに描いた《出獄の日のO氏》が、警視庁より第6回二科展からの撤去を命じられ、一躍、画壇話題の中心人物となり、その後、この作品は“まぼろしの名画”と呼ばれるようになったのです。これは、芸術への政治弾圧が国内で行われた最初の事件として、語り継がれることになりました。

留学から新文展の審査員へ

倭衛はその後、大正10年からフランス、ドイツへ留学。足掛け6年に行んだ留学では、次々と訪れる日本人画学生の中心人物となり、遂には印象派を代表する画家、ポール・セザンヌのアトリエで制作を許された唯一の日本人画家となつたのです。

帰国後は、山本鼎らが創設した美術団体・春陽会に出品し、滯仏中の作品が非常に高い評価を受けました。春陽会の会員となつた倭衛は、伊豆や房総の海岸を描くなど、多くの風景画を残しています。

その後も意欲的に制作活動を続けた倭衛は、新文展（昭和11年から昭和19年まで行われた文部省美術展覧会、日展の前身）の審査員を務めるまでになり、日本の洋画界での地位を確立していきました。

晩年は、埼玉の浦和（現さいたま市）に移り住み、アトリエを構えて制作活動に励みました。しかし、酒好きがたたり肝臓を患い、終戦を待たずに49歳で急死しました。



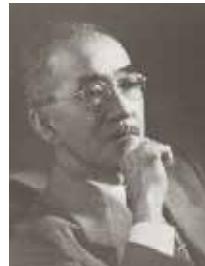
《フランスの女》(大正11年)

ハリー・K・シゲタ（重田欣二）

(はりー けー しげた/しげた きんじ)

上田から世界へ羽ばたいた写真家

明治20年～昭和38年（1887～1963）



上田からアメリカへ。国際的商業写真家への第一歩

重田欣二は、上田の原町に生まれました。絵を描くことが好きで、少年時代は竹や花、^{にわとり}鶴などをスケッチしてすごしていたそうです。ある日、欣二は通っていた上田中学（現上田高校）で海の向こうの国・アメリカのことを耳にします。「毎日新しい文明の奇跡がおきている」という異國の地に強い憧れを抱いた欣二少年は、いてもたってもいられず学校を中退し、上田からアメリカへと渡ります。明治35年（1902）、15歳の決断でした。

アメリカで生活を始めた欣二は、ハリー・K（キンジ）・シゲタと名乗るようになりました。ひと通りの英語を身につけると、美術学校に入学、幅広く美術を勉強します。この時、彼はモデルを撮影するためにカメラを使っていたのですが、次第にカメラ自体に興味を持つようになります。カメラの魅力にひかれていたシゲタは、やがて写真家の道を歩むことになるのです。

アメリカ社会が認めたシゲタの腕前

学校を卒業後、シゲタは肖像写真や広告写真を手掛ける商業写真家として働きます。商業写真の世界では、単純に写真を撮るだけでなく修整や合成といった技術が求められました。当時はパソコンやデジタルカメラなどがないネガフィルムの時代です。画像の一部を変えたり、整えたりするというのはとても大変なことでした。しかし、シゲタは持ち前の器用さで、細かい修整を加えたり、複数のネガを一枚に重ねて現像したりと工夫を凝らした写真をつくります。また、美術の知識や技法を取り

入れることで芸術的な写真も手掛け、注目されるようになります。

昭和5年（1930）、自らのスタジオ「シゲタ・ライトスタジオ」をシカゴに開くと、アメリカの大企業から次々と写真撮影の依頼が寄せられたといいます。また、昭和23年（1948）にはイギリスの国際写真コンペティションで作品《渦巻》^{とどろ}が最優秀賞を受賞し、その名は世界に轟き^{とどろ}きます。こうしてシゲタは、アメリカを代表する写真家の一人になったのです。



《渦巻》（1948年）

「私の使命はカメラによって貢献すること。」

シゲタは後進の育成にも尽力しています。自分が研究し見つけた技法やアイディアは、惜しまことなく多くの写真家に伝えていきました。この活動は当時のアメリカ社会でも絶賛されています。

こんなエピソードがあります。昭和16年（1941）、太平洋戦争が勃発したときのことです。日本人であるシゲタは敵国人としてアメリカ政府に拘束^{こうそく}されてしまいます。すると、スタジオのスタッフや多くの写真家仲間から嘆願活動^{たんがん}が起こったのです。「シゲタは敵国人ではなく大切な友だ。彼から受けた恩恵はとても大きい。」大勢の写真家からの声が届き、シゲタは拘束を解かれました。

「私の使命はカメラによって貢献すること。」シゲタはこう言っています。自分を受け入れてくれたアメリカに、自らの持つカメラの技術でその恩返しをしようと思ったのでしょうか。

昭和38年（1963）、シゲタはロサンゼルスで75年の生涯を閉じます。多忙な彼は、ついに故郷上田に帰ることはかないませんでした。しかし、彼の作品は故郷に戻り、上田市立美術館に収蔵・展示されています。海を越えて活躍した彼の功績は、時を経てこの上田の地に伝えられているのです。

半田孝海 (はんだ こうかい)

平和運動に取り組んだ宗教家

明治 19 年～昭和 49 年 (1886～1974)



青年団教育から平和運動へ

別所常楽寺の住職であった半田孝海は、東京帝国大学を卒業し上田蚕糸専門学校(現信州大学繊維学部)の講師を務めながら、大正 11 年(1922)から常楽寺で婦人の地位向上のための信州婦人夏期大学を 8 年間開きました。大正 13 年 8 月 9 日からの第 3 回夏期大学では、婦人参政権運動で有名な市川房枝いちかわふさえらを招きました。また、大正 11 年から小県連合青年団の幹部講習会を常楽寺に移し、中央から鶴山政道、河合栄治郎、末広巖太郎らの優れた学者を招き教育活動を行いました。その活動は大正デモクラシー運動として上田地域に展開された信濃(上田)自由大学と同時期にあたり、「青年団の自由大学」ともいえます。講習会は昭和 15 年まで続きました。

昭和 20 年 4 月、善光寺大勧進副住職に就任した孝海は、戦後、佛教者の立場からさまざまな社会運動に取り組みました。戦時中木曽川水系



中国訪問時の記念写真

や天竜川水系のダム建設などの強制労働で亡くなった中国人捕虜の遺骨を本国に帰す運動や、当時国交の無かつた中国との友好運動、北朝鮮やベトナムとの交流に携わりました。

昭和 39 年遺骨送還のため中国を訪問した代表団に対し、当時の周恩来しゅううおんらい首相から「本

来ならば日本が国としてやるべきことを半田さんがやってくださった。ありがとう」と感謝されました。

原水爆禁止運動へ

第二次世界大戦中、広島・長崎に投下された原子爆弾は、想像を絶する被害を与えました。さらに水素爆弾がつくられ、核戦争となれば人類滅亡の危機にさらされました。

そうした中で、国際的に原水爆禁止運動が高まり、昭和25年（1950）のストックホルム・アピールから世界的な反核運動が展開されました。原爆の被害を受けた日本では昭和30年（1955）広島で第1回原水爆禁止世界大会が開かれました。孝海は長野県代表団長として参加しました。この年の10月8日、原水爆禁止長野県協議会が結成されて、孝海は会長に選出されました。



第2回原水禁世界大会でのあいさつ

同年11月、大山郁夫、平塚らいでう、湯川秀樹らと共に日本原水協の代表委員に就任し、翌年の第2回世界大会（長崎）では議長団代表としてあいさつをしました。以後原水爆禁止運動は、考え方の違いや国際情勢の変化から分裂などの曲折を経ますが、運動の統一に苦慮しつつ、昭和46年まで16年間長野県原水協の会長を務めました。

孝海の運動の原点は、生き物の命をまもる（不殺生）、争いのない世界（和の尊重）、すべての生き物は等しく悟りの種子=仏性をもつ（平等思想）という仏教の考え方に基づくものでした。

孝海は、昭和49年に88歳で亡くなり、墓は常楽寺にあります。

（本稿写真は常楽寺提供）

半田孝淳 (はんだ こうじゅん)

てんだいざす
天台座主、最初の上田市名誉市民

大正 6 年～平成 27 年 (1917～2015)



半田孝淳は、別所常楽寺住職半田孝海の長男として生まれ、父の跡を継いで常楽寺の住職を務める一方、村会議員、保育園長、保護司、調停委員等を歴任しました。

天台宗内での功績も多く、探題等の役職を経て、90歳を迎えた平成 19 年 (2007) には第 256 世天台座主に就任しました。天台座主とは、平安時代にわが国の天台宗を開いた伝教大師最澄の弟子義真以来、連綿と続いている天台宗の最高位で、総本山比叡山延暦寺の貫主 (住職) として全国の天台宗寺院を統理する役職です。平成 21 年には、天台座主として初めて真言宗の総本山である高野山金剛峯寺を公式訪問し、1200 年もの間交流の無かった両宗派の交流に尽力しました。

また、同年には上田市最初の「名誉市民」の称号が贈されました。

日中友好運動

孝淳は父孝海の意志をついで、日中友好運動や平和運動に力を注ぎました。活動の原点は、父孝海が死の間際に手を握って「平和のために生きろ」と遺言されたことにあるといわれます。長野県の日中友好協会の副会長としても活躍しました。

国際派平和運動家

孝淳の活動は国際的規模で展開され「国際派平和運動家」とよばれました。諸宗教間の対話と協力により平和を実現しようとする運動はいくつかの試みがありましたが、昭和 61 年 (1986)、ローマ教皇ヨハネ・パウロ二世の提唱で、各国の宗教指導者がイタリアのアッシジに集い「平

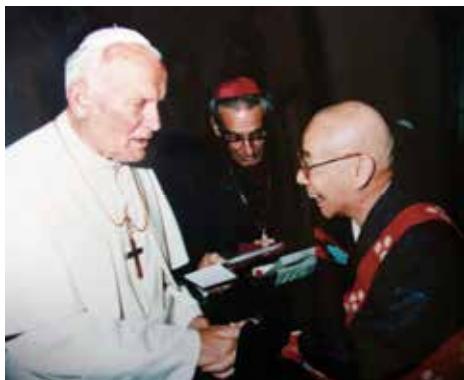
和の祈り」を捧げる会が催されました。以後毎年「世界宗教者平和の祈りの集い」として対話と祈りの会がもたれるようになりました。

これに賛同した故山田恵諦天台座主（第 253 世）は、その開かれた精神に共感し、その営みを世界各地に拡げるべく、天台宗として昭和 62 年（1987）第 1 回比叡山宗教サミットを開催することになりました。ローマ教皇の賛同を求めるため使節団が結成され、孝淳が団長としてローマを訪れ、バチカンのサンピエトロ広場で教皇と会って山田座主からの親書を渡し、最初の比叡山宗教サミットを実現に導きました。

平成 17 年（2005）にフランスのリヨンで開かれた集会（第 19 回）では、天台座主代理として出席し、ファイナルセレモニーの挨拶で「日本は原子爆弾が投下され、筆舌に尽くしがたい被害を受けた世界で唯一の国です。（中略）原爆による死は、人類史上無かつた死です。大量無差別の凄惨な死は、人間が作り出した死です。人間が作り出した悪魔の兵器は、人間の責任において廃絶すべきです。」と述べ、あわせて峰三吉の「ちちをかえせ ははをかえせ」（にんげんをかえせ）の詩を朗読しました。2 千人の参加者は一斉に立ち上がり、賛同の大拍手に演説がかき消され、円形のローマ大劇場が揺れんばかりであったといわれます。平成 19 年（2007）、比叡山宗教サミット 20 周年日本宗教者代表会議が発足し、孝淳は名誉議長に就任、8 月には「世界宗教者平和の祈りの集い」が開催されました。宗教間の対立が続く今日、諸宗教の壁を越えた平和運動の偉大な先駆者でした。

平成 27 年 12 月 14 日に 98 歳の天寿を全うし、翌年には上田市葬が行われました。墓は比叡山延暦寺と別所常楽寺に建立されています。

（本稿写真は常楽寺提供）



ローマ教皇訪問

藤澤直枝 (ふじさわ なおえ)

昭和前期に上田の歴史をまとめた中学教師

明治 3 年～昭和 19 年 (1870～1944)



歴史へのこころざし

どんなところにも歴史はあり、誰にでも歴史はあります。例えば、上田にも歴史はあり、あなたにも歴史はあります。けれどもその歴史は、調べないことには分かりません。上田の歴史を明らかにしようとした人の一人に藤澤直枝がいます。

藤澤は明治 3 年南信の箕輪に生まれ、長野の師範学校を卒業し、小学校の先生になります。27 歳で校長になるのですが、中学校（現在の高校）の教師になると歴史の勉強を深めることをこころざします。

新しい歴史学を学ぶ

明治 28 年、東京帝国大学に史料編纂掛（現東京大学史料編纂所）が置かれ、新たにわが国の編年（事実の起こった年月順）史料の編纂が始まり、東大助教授（後に教授）三上参次が主任になります。藤澤は明治 25 年からこの三上の指導を受け、史料に基づく歴史学を学び、自ら歴史書を執筆するようになります。

上田中学校の教諭となる

明治 32 年、長野中学校（現長野高校）教諭となり上田支校（後に上田中学校・現上田高校）に務め、以後退職するまで上田中学校で歴史を教えます。また、大正 4 年には長野県史跡名勝天然記念物調査委員となり、地域の歴史などを調査・研究する公共的な仕事が始まります。この時すでに上田城・信濃国分寺・上田原古戦場などを研究し、報告しています。

『上田市史』の事業始まる

昭和5年1月、これまでの活動が評価され、上田市長勝俣英吉郎から『上田市史』の編さんを依頼されます。それをうけて藤澤は三上教授の指導を生かし、これまでの書物にとらわれず、史料に基づく新しい歴史を書くことにします。そのためには、日本全体の史料と地域に残されている史料を、しっかりと調べなくてはならないことを確認します。

瀧澤助右衛門の協力

日本の史料は、三上教授らが東大史料編纂所から『大日本史料』と『大日本古文書』の刊行を始めていたのですが、いずれも高価で購入は困難でした。この時、これらの書籍を購入して提供してくれたのが、原町の^{といや}旧問屋（宿場の役所で役人）出身で、信濃銀行取締役の瀧澤助右衛門^{たきざわすけえもん}でした。滝澤はさらに所蔵の原町問屋日記などを公開して、藤澤に協力を惜しみませんでした。

困難を超えて市史完成

『上田市史』のまとめは大変難しく、藤澤は昭和7年学校を退職して、調査と執筆に専念します。同12年、骨折して歩けなくなりますが、史料の書写や原稿の清書などに8人ほどの協力を得て、同15年1月5日『上田市史』上・下2冊が出版されました。

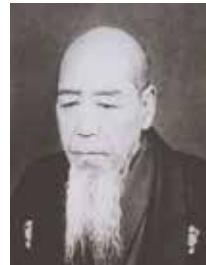
現在も上田市立上田図書館には、『大日本史料』・『大日本古文書』と、このとき書写された古文書や絵図が残されています。

藤本善右衛門（縄葛）

(ふじもと ぜんえもん/つなね)

長野県蚕種業者の代表
さんしゅ

文化 12 年～明治 23 年 (1815～1890)



蚕種の製造販売を営む藤本家

千曲川沿いにある上田市塩尻地区は、古くから良質な蚕種（蚕の卵）を育てる地でした。佐藤一族の総本家は屋号を藤本といい、江戸前期から上塩尻の地で蚕種業を営んでいました。藤本（佐藤）家の当主は代々「善右衛門」を襲名^{しゆうめい}していますが、江戸後期から明治にかけて活躍した昌信・保右・縄葛は広く知られた人です。この 3 人はそれぞれが蚕種の改良や販売に実績を残しましたが、ここでは縄葛に光をあてます。

蚕種を輸出した縄葛

保右の子として上塩尻に生まれた縄葛は安政 3 年 (1856) ごろ家を継ぎました。それ以前から家業に精を出し、弘化 2 年 (1845) には新品種「掛合」(信州かなす) を育成（上塩尻の清水金左衛門もこれと前後して掛合を育成したといわれています）、この種が大流行しました。掛合は幕末から明治初年にかけて輸出されます。父の保右が文政 10 年 (1827) に育成したといわれる「青白」も海外（特にイタリア・フランス）で好まれ販売量が多かったので、父子ともに日本蚕種の輸出に貢献したといえるでしょう。

蚕種の輸出が激増するなか、菜種などを蚕種原紙に張り付けた偽物や不良品が流通し、日本蚕種への信頼を失墜させる事態が起きます。これに危機感をもった上塩尻の蚕種業者は縄葛を代表とする組織「妙虫少連」を明治元年 (1868) に結成し、良質な蚕種を輸出する努力をしまし

た。この組織は明治 6 年に「均業社」と名を改めた長野県初の蚕種会社です。

長野県大総代となる

大蔵省は粗製濫造（悪質な品を多く製造）されていた蚕種を取り締まるため、明治 3 年に蚕種製造規則を発布して蚕種製造を免許制度とし、同 5 年には蚕種大総代制度を設けました。この制度を機能させるために全国にその責任者を決めました。縄葛はそれまでの実績を評価され、長野県の大総代に選出されました。大総代としての縄葛は、蚕種の製造販売に関する諸制度整備の会議や打ち合わせのため、東京や長野へ長距離の出張を繰り返しました。さらに県下の蚕種業・養蚕業・製糸業など蚕糸全般についての指導・監督する仕事も、制度が廃止される明治 8 年まで続けました。大総代の任務を終えた後も伝習生を受け入れ、子の信汎とともに養蚕・蚕種製造の指導をしました。その当時は長野県職員で、のちに小県蚕業学校（現上田東高校）の校長として日本の蚕業教育に貢献する三吉米熊も、縄葛父子の指導を受けるために、長野から徒歩や馬車で上塩尻へ通っています。

文人としての業績も残した縄葛

蚕種製造販売には信用が第一、信用されるには良質な蚕種を製造するとともに高い教養が必要になるという伝統が塩尻に受け継がれています。縄葛も国学・歌学・神道を学び、隠居前後の明治 10 年から没する 23 年までの間に『続錦雑誌』89 冊を著しています。その内容は古文書、考古資料、金石文、地誌、正倉院御物、草木図、鳥類図、桑葉図など多岐にわたっています。

正木直太郎 (まさき なおたろう)

明治期の長野県教育界をリードした人

安政 3 年～昭和 9 年 (1856～1934)



上田小県地域へ音楽教育を導入

明治 15 年 (1882) 4 月、東京師範学校を卒業した正木直太郎は郡立小県中学校（現上田高校）へ教諭として赴任、2 年後には校長に抜擢されます。直太郎は長野師範学校長能勢栄とともに、唱歌教育を推し進めました。能勢がバイオリンを使用したため、バイオリンによる唱歌教育が盛んになりました。これを受け、県下では三味線を改造した模造バイオリンが長野・上田・松本・木曽で製造されるほどになりました。外国製は高価で買えなかったからです。

明治 16 年 5 月直太郎は、小県中学校内に小県唱歌伝習所を開き、文部省音楽取調掛伊沢修二の助力を得て講師を東京から招き、唱歌教育を開始します。文部省のきまりでは箏・胡弓を楽器として使用するとなっていましたが、受講生たちはバイオリンでと主張します。しかし、県に残る明治 17 年の文部省認可書には楽器は風琴・箏・胡弓で、とあります。上田での実情はどうだったのでしょうか。東京からの講師はその任期を延長して、唱歌伝習所と小県中学校で唱歌の授業を続けています。

直太郎は現在に通ずる音楽教育を、上田小県地域に初めて導入し、確立したのです。

藩士の子が教育の世界へ

上田藩士正木六郎左衛門の子として生まれた直太郎は、元治元年 (1864) から上田藩校で学びました。慶応 2 年 (1866) の長州征討に従

軍した父が病死したため、直太郎は 11 歳で家督を相続しました。廃藩置県後、上田松平学校の代用教員となります。力不足を知り、明治 7 年に上京します。英語を学んだあと明治 9 年に東京師範学校に入学し、卒業後は前述のように小県中学校で校長として実績を上げ、県下にその名を知られるようになりました。

長野県教育界のトップに

上田での 2 年間を評価された直太郎は、明治 19 年長野県尋常師範学校教諭に転出します。教育研究に努力し生徒たちからも信頼された直太郎は、教頭心得を経て明治 26 年に第 3 代師範学校長及び信濃教育会長となり、明治 32 年までの 6 年間を務めました。歌人太田水穂は、直太郎は進歩的な教育理論を積極的に取り入れた新教育期をつくり、生徒は「寛大教育の恩恵」で「各自の情情を自由にのびのびと開放し」「それぞれの嗜好にしたがってある程度の専門的研究を積む傾向」を生み「個性の展開」がみられたと論じています。

最後は小諸尋常高等小学校長に

明治 32 年、直太郎は埼玉県師範学校長に転出、更迭ともみられたこの人事は、県下の教育界を驚かせました。彼を慕う 200 を超える人々は盛大な送別会を開き、彼の業績をたたえました。送別会ではこの転出に異を唱える発言もありました。その後、香川師範学校長として高松市に赴任、教科書事件に巻き込まれ退職しました。

直太郎は徳風を慕われ、大正 2 年（1813）小諸尋常高等小学校長として迎えられました。「日本的小諸小学校」をめざして尽力し、70 歳で退職して、上田に帰りました。晩年は長男の住む東京に移り、79 歳で没しました。医学博士で小説家の正木不如丘は彼の次男です。

松平忠禮・忠厚

(まつだいら ただなり・ただあつ)

最後の上田藩主とその弟

忠禮 嘉永3年～明治28年 (1850～1895)

忠厚 嘉永4年～明治21年 (1851～1888)



明治維新期の上田藩主忠禮

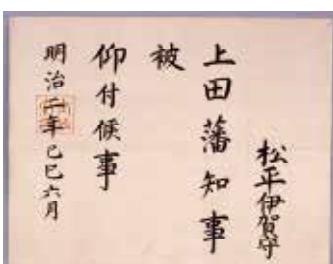
ただかた ただます

松平忠固（忠優）の子忠禮は、幕末から明治の激動期に上田藩主から上田藩知事となり、その困難な務めを果たしました。職を退いたあとには弟忠厚とともにアメリカに留学し、帰国後は外務省に勤務しています。明治17年（1884）子爵となり、28年（1895）46歳で没しました。

安政6年（1859）、忠禮はわずか10歳で家督を相続し上田藩主となりました。文久元年（1861）和宮降嫁のとき、上田藩は中山道山本宿から和田宿までの道中警護を任せられ、忠禮はこれを指示しました。慶応元年（1865）の長州征討では上田領内から1万両の御用金を調達して、徳川將軍左右の備えをしました。しかし、將軍家茂が大阪にとどまったため、忠禮率いる上田藩兵は戦闘には参加しませんでした。

慶応4年（1868）1月、忠禮は徳川軍とともに薩長軍と戦うべく洋式兵制を推し進めましたが、4月には新政府軍の一員として越後長岡に出兵（北越戦争—戊辰戦争のうちの一つ）するという苦しい選択が続きました。

明治2年（1869）6月には版籍奉還があり、忠禮は上田藩主から明治政府の地方官である上田藩知事に任命されました。同年8月には上田領全域の村々を巻き込む上田騒動（巳年騒動）が起きその対応に苦慮しましたが、一揆勢の要求の多くを受け入れて



上田藩知事の辞令

(上田市立博物館所蔵)

います。武士による支配の世が終わったことを、それぞれの立場の人が実感した出来事でした。明治4年の廃藩置県により忠禮はその職を退き、5年に弟欽次郎（^{きんじろう}忠厚）とアメリカに渡り、勉学に励みました。

アメリカで土木技師となり活躍した忠厚

嘉永4年（1851）に忠禮の弟として生まれた忠厚は、文久元年（1861）塩崎知行所5千石（現長野市）の旗本松平家の養子となります。慶応3年（1867）には家督を相続し、塩崎の領主とななります。しかし、翌明治2年（1869）には、版籍奉還で土地と領民を新政府に渡し、東京へ移住しました。

明治5年（1872）松平兄弟はニュージャージー州プランズウイク市のラトガース大学へ入学しました。明治12年兄忠禮は大学を卒業して帰国しますが、忠厚はアメリカに残り、以前から学んでいたマサチューセッツ州ウースター工芸学校で学び続けたといわれています。

そのころアメリカ人女性と結婚した忠厚は、土木技師として働きはじめました。在米の日本人としては初の土木技師として、マンハッタン高架鉄道のブルックリン吊橋建設などを手掛けた忠厚は、アメリカ人の注目を集め、ニューヨーク・タイムズほか地域の新聞が彼の才能や技術を取り上げ賞賛しています。

しかし、結核に冒され転地療養のためコロラド州デンバー移住、ここでも療養しながら技師として働いていましたが、明治21年（1888）1月に36歳で没しました。

忠厚と夫人カリー・サンプソンとの間には3人の子どもが生まれましたが1人は早世、1人は成人して結婚しましたが若くしてフィリピンで亡くなっています。1人残ったキンジロウは、ワシントンのデパートに勤務しながら、メリーランド州エドモンストンの市長の仕事にもたずさわりました。



忠厚の設計図面
(上田市立博物館所蔵)

松平忠優（忠固）

（まつだいいら　ただます/ただかた）

日本の開国と貿易に尽力した藩主

文化9年～安政6年（1812～1859）-



上田藩主、幕府の老中となる

姫路藩主酒井忠実の子として生まれた松平忠優は、文政12年（1829）上田藩主松平忠学の婿養子になり、翌年19歳で上田藩主となります。

子どものころから優秀だった忠優は、上田藩主に就いた4年後（天保5年）には早くも江戸城の奏者番（将軍と大名を取り次ぐ役）となり天保9年（1838）27歳で寺社奉行、弘化2年（1845）大坂城代となりました。嘉永元年（1848）には37歳の若さで幕府老中（徳川幕府最高の役職）に昇りつめたのです。

上田を豊かにするための政策

忠優は上田藩主として領民（藩内の人々）の生活を豊かにしようと養蚕を奨励、絹織物の改良・品質向上を図り販売に力を入れます。天保4年に上田産物改所を設置、大坂城代在職中には大阪の街に上田産物売捌所を開き、上田縞や上田紬を販路拡張に努めました。

安政4年（1857）上田藩は上田と江戸に産物会所を設置、地元の産物を江戸で売るしくみを確かなものにします。この会所が4年後の外国貿易開始直後から役立つのです。

ペリー来航と日本の開国

嘉永6年（1859）アメリカのペリーが4隻の軍艦（黒船）を率いて江戸湾に来航しました。長い間鎖国状態にあった日本の開国を促すためです。開国をするか否か、幕府は迷います。開国しようという意見もありましたが、天皇や徳川斉昭をはじめとする有力大名は反対し外敵を打ち払い鎖国を続けるという「攘夷論」を唱えます。

開国か鎖国か、忠優も悩み続けます。しかし、世界の情勢を知っていた忠優は、鎖国を続けると戦争になり植民地化される恐れもあると判断、開国を主張します。安政元年（1854）幕府は日米和親条約を結びました。

徳川斉昭はこれに異をとなえ幕府参与を辞任、老中主席阿部正弘も責任

を負い辞任、政治情勢がますます混乱、忠優も老中を解任されます。

開国を求める外国からの圧力が強まり、幕府は西洋事情に詳しい堀田正睦を老中主席にます。安政4年（1857）忠優は次席として老中に復職、正睦とともに外国との交渉に当たりました。46歳の忠優はこのとき名を忠固と改め、開国にさらに意欲を示します。



松平忠優画贊軸

（上田市立博物館所蔵）

条約締結と開国

安政5年大老に就任した井伊直弼にアメリカ総領事ハリスは通商条約の締結や開港を迫ります。直弼はあいまいな態度を取りましたが、忠固と正睦は条約締結を主張、同年6月幕府は日米修好通商条約を結びました。しかし4日後、忠固と正睦は勅許（朝廷の許可）を待たずに条約を結んだという口実で老中を解任されます。これは井伊直弼や幕府の責任回避の手段だったとも考えられます。条約にしたがい安政6年（1869）6月に横浜が開港しました。

忠固は安政6年9月に急死しますが、その3か月前、上田は他藩に先駆けて横浜から外国に向けて生糸を出荷します。横浜開港当初から上田の特産物である生糸を輸出するという忠固の願いがかなったのです。以後生糸は、上田地域はもとより近代日本の主要な輸出品として日本経済を支え続けます。



松平忠優の墓（願行寺）

松山原造（まつやま げんぞう）

農業機械化の時代に先駆けた近代犁の発明者

明治 8 年～昭和 38 年（1875～1963）



松山原造は、明治 8 年、小県郡大門村（現長和町大門）に生まれました。原造が生まれた家は、代々庄屋を務める家筋で祖父篤志朗は漢学に優れ、近隣の豪農子弟に出張教授をしていました。原造はその祖父の厳格な教育を受けました。10 歳の時、祖父の遺言によって一番弟子であつた小県郡和村（現東御市和）の田中新太郎に預けられ、その訓育を受けながら小学校に通いました。

田中新太郎は後に和村の村長となり、また東筑摩郡山形村に堰を通し、同郡西条村の炭鉱を経営した事業家です。原造を名家にふさわしい人物に育てるため漢学を教え、家業であった農業、酒造、優良馬の飼養を指導しました。

小県郡・埴科郡の農事教師に

明治 25 年（1892）5 月に長野県は、先進地の農業技術の導入をはかるため福岡県の篤農家林遠里の主宰する勧農社から原田勝三郎を米作改良教手として雇いました。そして馬に抱持立犁という犁を引かせて耕す馬耕をはじめとして糲の塩水選種や短冊苗代や除草のための雁爪打ちなどの福岡農法を普及させました。

明治 29 年（1896）には勧農社から古川列一が小県郡の農事教師として赴任し、田中新太郎の水田が模範田になりました。馬が好きでその扱いに手慣れていた原造は、古川農事教師の馬耕の補助を頼まれました。村々を巡回しながら、犁を抱えて土を反転させていく抱持立犁の耕法をたちまち身につけました。明治 30 年（1897）小県郡役所農事教師の助手に、32 年には埴科郡農会農事教師となり、郡内を巡回して馬耕技術をはじめとする福岡農法を教えました。

そうようすき 双用犁を発明する

原造が教えていた抱持立犁は不安定な犁で、均一に耕すための性能や操法に難しさを感じていました。原造は犁へら犁先をレバーで左側へも右側へも反転させることのできる犁、つまり往復耕とともに同一方向に土を耕せる「可動犁へら」の犁にすれば楽に犁耕ができると考え試作を重ね、犁先には鋼をつけて土の切れ味をよくした近代的な犁を完成させました。農事教師在職中の明治 33 年（1900）秋のことです。

当時原造は、小県蚕業学校（現上田東高校）校長三吉米熊博士の教えを受けていたので、この犁は同博士によって「单鎌双用犁」（一枚の犁先で右反転も左反転もできる犁）と命名され、翌 34 年 12 月 3 日、特許第 4975 号を取得しました。この特許は田畠を耕す農機具として、実用化された中で一番古い特許といわれています。

明治 35 年（1902）6 月和村に「单鎌双用犁製作所」を創業して、双用犁の製造と販売を始めました。安定して土を左右に反転できるこの犁は、「松山犁」と愛称されるようになりました。

動力が牛馬からトラクタに変わった昭和 30 年代では、原造の考案した双用犁の機能を活用した小型トラクタ用作業機が全国に普及して、原造の発明は日本の農業技術の発展に貢献しました。昭和 38 年、原造は 88 歳の生涯を閉じました。

原造の起きた犁製作所は松山株式会社と改め、トラクタ用ロータリ一を中心とする農業用作業機械のトップメーカーとして現在に続いています。また、原造と松山株式会社に関する資料は、公益財団法人松山記念館に収蔵・展示されています。

（本稿写真は公益財団法人松山記念館提供）

丸山千代子（まるやま ちよこ）

女性の自立と地位向上の道を拓いた先輩

明治 40 年～昭和 60 年（1907～1985）



神科小学校教師

激動の 20 世紀を自立して歩み続けた千代子は、川原柳の橋詰林平の三女として生まれました。女子に学問は不要という風潮の中で向學心は強く、県立上田高等女学校（現上田染谷丘高校）に進学しました。

卒業後尋常小学校正教員の検定に合格し、神科尋常高等小学校（現神科小学校）に勤務しました。3 年間の教員経験は、その後の千代子の生き方に大きな影響を与えました。

社会へのかかわりに目覚めて

退職後は、地域の女子青年団のリーダーとして活動していく中で、先輩・深町広子（上田自由大学へ参加、大正デモクラシーを生き抜き、農民文学の道を進む）との出会いがあり、次第に社会との関わりに目覚めその資質は磨かれ、様々な所でその力量が發揮されました。「女子もこれからは男子と対等に活躍すべきであり、“女性の社会進出は下穿き（下着）を着ける事から”」と主張し、自立のための学習に取り組みました。この頃から「信州婦人夏期大学」大正 11 年（1922）、「上田自由大学」昭和 3 年（1928）に参加し、ものの見極めの大切さを身につけていきました。

結婚と育児と商店の経営

昭和 9 年（1934）丸山三治郎と結婚し、夫と共に海野町に丸山商店を創業しました。子育てや家事に追われる中で多くの問題に気付き、「父母の会」を結成して皆の問題として活動を始めました。この事はこれから

の地域活動の布石となりました。家業の経営近代化を夫と共に果たし、役員にも就任し、女性企業家としての地歩を固めていきます。しかしその途半ばで夫が亡くなり、千代子はすべての責任を一身に負うことになりました。

昭和 35 年（1960）中央商店街に「商店主婦の会」を立ち上げ、初代会長に就きます。今日の商工会議所婦人部の基となりました。昭和 38 年（1963）には上田商工会議所初の女性議員に当選しました。

地域社会への貢献

新憲法に人権の尊重・男女平等が明記され、千代子の中で培われてきた生き方の方向が示され、それは新たな自信となりました。民主主義の思想は徐々に浸透し、女性活躍の環境は整いはじめました。

千代子は、上田市婦人専門委員・上田家庭裁判所調停委員・長野婦人少年室協助員など公的な場での活動の功績により昭和 60 年（1985）勲五等瑞宝章^{だいほうしやう}を受章しました。また、上田清修寮^{せいしゅうりょう}（少女教護院）の篤志面接員としての実績により労働大臣表彰を受けました。

地域においては、市営産院開設運動・地域で働く若い従業員の福利厚生へ向け「海友会」の運営、婦人団体活動など、一つ一つの課題に熱心に取り組んでいます。

国連婦人年を迎えて

国連が提唱する「国際婦人年」昭和 50 年（1975）の波は、長野県にも影響を及ぼし県下の女性有志により、昭和 53 年（1978）「長野婦人問題研究会」が設立されました。初代会長に就いた千代子は「婦人には婦人の数だけ悩みはある。正しい目で見極め…」と迫力ある挨拶は見事でした。

女性の自立を願い活動をし続けた生涯を、不慮^{ふりよ}の事故で突然閉じてしましました。享年 77 歳でした。

三吉米熊（みよし よねくま）

上田から日本の蚕糸教育を推進
万延元年～昭和2年（1860～1927）



長州から東京へ

長府藩士三吉慎蔵の子として長門国（現山口県）に生を受けた米熊は、明治4年（1871）父に伴われ上京しました。藩が廃止され旧藩主毛利元敏が東京へ住むことになり、慎蔵が旧藩主に随行したためです。慎蔵は長府藩の槍術師範で、坂本龍馬らと活躍した人としても知られています。

米熊ははじめ英学などを学び、明治7年（1874）公立工学小学校に入学、明治10年には近藤真琴塾で算術・英学・測量などを修めたといわれます。さらに明治11年には駒場の勧農局農学校に入学し農芸化学を中心に学びました。

長野県職員として

米熊は長野県の職員として就職しましたが専門は農芸化学で蚕糸業についての知識はありませんでした。上田地域との最初の関わりは明治17年に小県郡長瀬村におきた蚕種紙問題です。蚕種紙（蚕が卵を産み付ける和紙）に問題があるという群馬県の訴えがあり、米熊が紙質検査し、問題なしと結論づけたことにより、長瀬村の蚕種紙は以前に増してよく売れるようになったといいます。このときは農芸化学が生きたのですが、明治17年上伊那の農談会での蚕糸業に関する質問には対応できませんでした。蚕糸業は学んでこなかったのですから当然の結果です。

当時の長野県の主要産業であった蚕糸業についての見識がなくては、この職は務まらないと感じた米熊は猛勉強をはじめます。まず東京の西ヶ原蚕病試験場に出向き、蚕の病気についての研修を深めました。次に長野から上田の藤本善右衛門家へ通い、塩尻地域での養蚕・蚕種製造を

実践しつつ学びました。このようにして蚕業指導の第一人者に成長した米熊は、講演会や実地指導で桑や蚕の病気への対処法、より良い蚕の飼育法を県下各地に定着させました。

ヨーロッパの蚕糸業を学ぶ

明治 22 年 (1889) 3 月米熊は政府の要請を受け 4 人の専門家と共にフランスとイタリアの蚕糸業界視察の旅に出発しました。半年の間に政府から依頼された人造絹糸調査やミラノの蚕業試験場やトリノの生糸検査所、製糸場などを視察しました。視察期間は終わりましたが、留学許可を得た米熊は一人ヨーロッパに残り、イタリアとフランスの蚕糸業についての調査の続行と研修を深めました。モンペリエの養蚕試験場やリヨンの生糸検査場などで研修を終えた彼は同 24 年 7 月に帰国しました。

小県蚕業学校校長に

米熊が帰国する前年から、上田小県の蚕糸業界は日本初の蚕業学校を上田に設立しようという運動を展開していました。帰国した米熊を校長に迎えたいという動きも活発化、その中心には小県郡長の中島精一、佐久の井出喜重、信濃蚕種組合の工藤善助らがいました。蚕糸業界の願いがかない、明治 25 年 (1892) 三吉米熊を校長に迎えた小県蚕業学校（現上田東高校）が開校します。

米熊は実習を重視した蚕業教育を進展させ、上田蚕糸専門学校（現信州大学織維学部）の設立にも尽力、同校の教授も勤めました。彼は在職中に 68 歳でその生涯を閉じました。



小県蚕業学校の実習

山極勝三郎 (やまぎわ かつさぶろう)

世界初人工ガン発生に成功した医学博士

文久 3 年～昭和 5 年 (1863～1930)



勝三郎少年の夢

山極勝三郎は、江戸時代の末に上田藩下級武士山本政策の三男として上田城の北の鎌原 (中央西) に生まれました。父は寺子屋を開いており、そのため勝三郎は幼いころから向学心に燃えていたそうです。明治維新の混乱を経て、勝三郎は小学校 (松平学校) から変則上田中学へと進み、優秀な成績を修めました。特に『輿地誌略』という社会の教科書を何度も読み、「世界に名を知られる人になりたい」という夢を持ちました。

医学者の道へ

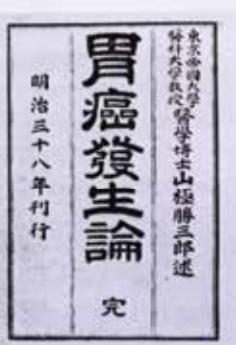
16 歳の時、東京で医者をしていた旧上田藩医山極家の養子となり、医学の道を志して上京します。勝三郎は東京帝国大学医学部に進学し、優秀な成績で褒賞金などを受け家計を助けました。また、竹馬の友のおがわしげじろう、小河滋次郎らとともに上田出身者の親睦と研究発表の場「上田郷友会」を立ち上げました。

山極家の長女かね子と結婚し、長男一郎が生まれますが、半年後に風邪がもとで死んでしまいます。大切なわが子を失った勝三郎は、学卒業後も大学に残り、病理学研究に進む決心をしました。

その後のドイツ留学で病理学を学び、ガン研究の考え方の元ができたといわれています。帰国し、32 歳で東大医学部教授になり、ますます学生の指導と病理学研究にのめり込んでいきました。

『胃癌発生論』

(明治 38 年)



しかし 36 歳の時、不治の病と恐れられていた肺結核に冒されてしまいます。主治医から絶対安

静を告げられると、「動かない・話さない」を厳格に守り徹底した療養に務めましたが、喀血^{かっけつ}は死ぬまで続きました。

人工ガン発生実験

勝三郎は重い病気に耐えながらも、「ガンの発生原因が分かれれば予防法や治療法が分かる」と考え、人工ガン発生実験に取りかかります。市川厚一^{いちかわこういち}を助手に迎え、毎日毎日根気強くウサギの耳にコールタールを塗り、皮膚ガンを発生させる実験を続けました。実験用のウサギの大量死など多くの困難にあいながらも、勝三郎は自分の考えを信じ黙々と実験を続け、ついに大正4年(1915)5月に人工ガン発生に成功しました。

「癌出来つ意氣昂然と二歩三歩 曲川」^{がん いきこうぜん きょくせん} その時の喜びの句です(曲川は千曲川にちなんだ俳号)。

まぼろしのノーベル賞

勝三郎は、人工ガン実験成功でノーベル生理学・医学賞の候補となります。しかし勝三郎より先に寄生虫による人工ガン実験に成功したデンマークの病理学者フィビゲルにノーベル賞が与えられました。しかし後にフィビゲルの実験の間違いが分かり、改めて勝三郎の実験の正確さが評価されたのです。

東京大学を退職した勝三郎は、ガン予防に力を入れ、分かりやすい文を新聞などに載せました。そして昭和5年3月の寒い夜、急性肺炎のため67歳で亡くなりました。山極家の墓^{やなか}は東京谷中天王寺にあります。また、上田市房山の淨楽寺の山本家の墓には、ふるさと上田を愛した勝三郎が分骨され静かに眠っています。



山極勝三郎胸像
(上田城跡公園)

山本 鼎 (やまもと かなえ)

上田に芸術の種をまいた画家

明治 15 年～昭和 21 年 (1882～1946)



そうさくはんが 創作版画を広める



《漁夫》

(明治 37 年)

山本鼎は、愛知県岡崎市生まれです。小学校を卒業した後、木版を作る工房で 9 年間修業し、木版の原版を彫る技術を身に付けました。20 才になった鼎は、もっと広く深く芸術を勉強したいと考えるようになります。東京の上野動物園のとなりにある東京美術学校（現東京芸術大学）に入学した鼎は、黒田清輝などの優れた先生から油絵の描き方を教わりました。また、工房で身に付けた技術を使って《漁夫》という版画を制作します。実は日本で「版画」という言葉が生まれたのはこの時、この作品が最初です。分業化されていた浮世絵とは異なる「創作版画」の誕生です。

フランス留学とロシアでの出来事

鼎は東京美術学校を卒業すると、フランスに留学します。長い芸術の歴史があるフランスで、版画や油絵の勉強をしようと考えたからです。パリにある学校で学びながら、生活するため木版の工房でアルバイトをしました。それでも留学生活は苦しく、食事がオレンジ 1 個だけという日もありました。一方で、彼は多くの美術館や画廊を見学し、写生旅行などに出かけて多くの作品を残しました。油絵《自画像》や版画《ブルトンヌ》は、鼎の代表作です。日本への帰国の途中、鼎はロシアのモスクワに滞在しました。彼はそこでロシアの子どもたちの自由に描いた絵と、寒い冬の間に農家の人たちが作った木製の人形や家具などの工芸品を見て、強い感銘を受けたのです。鼎は上田の大屋駅近くにある両親の家に帰ると、モスクワで見たことを元に活動を始めます。

えが 自由に絵を描くことが大切

当時の小中学校では、お手本帳の絵をきれいに写す授業が行われていました。しかし、自由に絵を描くのが仕事である鼎には、それが我慢できません。ロシアの子どもたちのように、自由に描いてこそ自分らしさが表現できると考えた彼は、「自由画こそ大切だ！」と全国の先生に伝えるために話して回りました。この運動は「児童自由画教育運動」と呼ばれています。運動を始める時、金井正、山越脩蔵という二人の上田の青年が協力しました。神川小学校は日本で初めて「児童自由画展覧会」が行われた場所として有名です。

のうみんびじゅつ 「農民美術」を全国に広める

自由画運動の次に鼎が始めたのは「農民美術」の運動でした。ロシアの農村の人々が作った工芸品を見た彼は、米作りと養蚕が主な仕事だった上田の農家の人々にも、冬の間の仕事と同じことができないかと考えたのです。木製の人形やお皿、織物などの工芸品を作り出す喜びを感じること、そして、売って収入を得るという二つの目的がありました。農家の人々が作る美術的工芸品という意味で「農民美術」と名付けられました。鼎の始めた農民美術は全国に広まり、今でも上田には15人ほどの農民美術を作る作家がいます。

種をまく人

山本鼎は昭和21年（1946年）に63才で亡くなりました。神川小学校の中庭に「自分が直接感じたものが尊い。そこから種々の仕事が生まれて来るものでなければならない」という鼎の言葉を刻んだ石碑があります。彼はこの信念を一生大切にしていました。

現在、彼の残した作品や資料は上田市立美術館が大切に保管し、多くの人に公開しています。芸術の種をまき続けた画家・山本鼎の思いは、しっかりと芽吹いたのです。



大正時代に作られた農民美術
おりもの

依田郁子（よだ いくこ）

昭和 39 年(1964) 東京で開催

第 18 回オリンピック 80m ハードル 5 位入賞

昭和 13 年～昭和 58 年 (1938～1983)



昭和 20 年 (1945)、長かった戦争が終わって東京は焼け野原となりました。家も食べ物もなく、親もなくし、孤児となった子どもたちも大勢いました。しかしそこから立ち上がってみんな必死に働き日本は復興しました。19 年後の昭和 39 年 (1964) には世界の人々を迎えて東京オリンピックが開かれました。この時 80m ハードルに出場したのが丸子出身の依田郁子でした。

走ることが大好きな少女

郁子は子どもの時から運動が大好きでした。特に走ることが好きで、小学生のころの町内運動会では出場する種目に全部優勝して、賞品の炭火コンロを一人で 7～8 個もらってしまい、お父さんはそのコンロをリヤカーに乗せて近所のお宅へ「もらっておくれや」と配って歩いたそうです。

中学生になると上小体育大会に出場し、100m 走で 2 年・3 年の 2 回とも優勝しています。高校は上田染谷丘高校に進学し、陸上競技班（部）に入りました。班員は 10 数人で皆仲が良く、温かい雰囲気でした。高校で初めてハードルに取り組み、インターハイに出場して 2 年生で 13 秒 2、3 年生で 12 秒 6 のタイムで優勝しています。高校を卒業するとき、いろいろな大学や企業の陸上部から誘いがきました。郁子は進学したいとも思いましたが、それよりも陸上競技をもっと続けたいと考えました。沢山の誘いの中から郁子は「リッカーミシン株式会社」を選びました。それは吉岡隆徳監督たかよしがいたからです。吉岡監督は明治 42 年 (1909) 生まれですが 100m 走で 10 秒 3 の記録を持ち、昭和 7 年 (1932) に開催された

第10回ロサンゼルスオリンピックで6位に入賞しました。これは東洋人として初の快挙で、彼は以後「あかつき暁の超特急」と呼ばれるようになり、その実績を買われて、昭和29年（1954）からリッカーミシンの陸上部顧問となりました。郁子はこの監督に一から鍛えてもらいたいと願ったのでした。

オリンピックへの出場

昭和33年4月（1958）からリッカーミシンの陸上競技部へ入った郁子は、他の部員より強くなるために早朝5時ころから約2時間の練習を一人で始めました。それに気づいた吉岡監督も早く起きて練習のアドバイスをしてくださるようになりました。しかし、昭和35年（1960）ローマオリンピックへの予選会では体調が悪く良い記録が出せませんでした。

ローマ大会へ行かれなかった郁子は、ますます練習に没頭し、それまでは休日におしゃれをして友達と遊びに出かけることもありましたが、やめました。食べ物も体に良いものだけを選んで食べ、毎日の練習記録を必ず夜書き記しました（練習記録帳「郁子のスパイク」）。

4年間、時間のすべてを体作りと記録の向上に使ってきました。郁子は、たびたび日本記録を更新し、念願の東京オリンピック女子80mハードルに出場しました。郁子は日本の五輪史上で陸上女子短距離種目としては、初めて決勝レースに進出し、10秒7の好記録で5位入賞を果たしました。翌年に公開された映画「東京オリンピック」（市川崑総監督）では、郁子の雄姿を今でも見ることができます。

昭和40年（1965）郁子は高校の教師をしていた宮丸凱史と結婚し、男の子も生まれました。やがて夫と共に東京女子体育大学で学生のコーチをしたり、あちらこちらから講演を頼まれたりしました。幸せな暮らしに見えましたが、市民体操教室の講師をしている時にひざを痛め、それがもとで徐々に体の不調を訴えるようになりました。昭和58年（1983）10月14日、郁子は45年の生涯を終えました。

（本稿写真は『写真集 上田の百年』信濃路 1976年刊より）

関連施設・参考文献

この冊子で紹介した人物やそれ以外の郷土の先人・偉人について、さらに詳しく知りたい場合や、作品を鑑賞したい場合は、以下の各施設にお問い合わせください。学芸員や司書が関連する資料・作品・図書などをご案内します。また、図書は上田地域広域連合図書館情報ネットワーク（エコール）のホームページから検索することができます。

【関連施設】

- ・上田市立博物館 上田市二の丸 3-3 TEL. 0268-22-1274
URL. <http://museum.umic.ueda.nagano.jp/hakubutsukan/gaiyou/gaiyou.html>
 - ・上田市立丸子郷土博物館 上田市東内 2564-1 TEL. 0268-42-2158
URL. <http://museum.umic.jp/maruko/index.html>
 - ・上田市立美術館 上田市天神 3-15-15 TEL. 0268-27-2300
URL. <https://www.santomyuze.com/museum/>
 - ・池波正太郎真田太平記館 上田市中央 3-7-3 TEL. 0268-28-7100
URL. <https://www.city.ueda.nagano.jp/tanoshimu/ikenami/index.html>
 - ・公益財団法人 松山記念館 上田市塩川 2874-1 TEL. 0268-35-3650
URL. <http://www.matsuyama-museum.or.jp/>
 - ・常楽寺美術館 上田市別所温泉 2347 TEL. 0268-37-1234
URL. <http://www14.ueda.ne.jp/~jorakuji/office7001.html>
 - ・赤松小三郎記念館 上田市二の丸 4-6 上田招魂社内
 - ・上田市立上田図書館 上田市材木町 1-2-47 TEL. 0268-22-0880
 - ・上田情報ライブラリー 上田市天神 1-8-1 TEL. 0268-29-0210
 - ・上田市立丸子図書館 上田市中丸子 1771-11 TEL. 0268-42-2414
 - ・上田市立真田図書館 上田市真田町長 7178-1 TEL. 0268-72-8080
 - ・上田市武石公民館図書室 上田市下武石 740 TEL. 0268-85-2030
- 上田地域広域連合図書館情報ネットワーク URL. <http://www.echol.gr.jp/>
- ※博物館や美術館所蔵の資料や作品は、原則として展示中のものに限り
ご覧いただけます。

【参考文献】

- ・『小県郡史』本編・餘篇 小県郡役所編 1922・1923年
- ・『上田市史』上・下巻 藤澤直枝著 1940年
- ・『上田小県誌』全6巻 上田小県誌刊行会編 1960～1995年
- ・『上田近代史』上田市史編さん委員会編 1970年
- ・『上田市誌』全31巻 上田市誌刊行会 1999～2004年
- ・『丸子町誌』全5巻 丸子町誌刊行会 1992年
- ・『真田町誌』全5巻 真田町誌刊行会 1997～2002年
- ・『武石村誌』全4巻 武石村誌刊行会 1989年
- ・『上田小県近現代史研究会ブックレット』既刊24冊 上田小県近現代史研究会 1995～
- ・『長野県歴史人物大事典』神津良子編 郷土出版社 1989年
- ・『信濃名士傳』松下軍次著 1895年
- ・『信州蠶界之人物』尾崎章一著 信濃蚕業評論社 1929年
- ・『上田藩の人物と文化』上田市立博物館 1986年
- ・『上田城跡公園の石碑と胸像』大手町自治会石碑・胸像冊子作成委員会編 2013年
- ・『ふるさと豊殿郷土誌』ふるさと豊殿郷土誌編集委員会編 2009年
- ・『写真集上田の百年』小崎軍司ほか編 信濃路 1976年
- ・『松平忠固・赤松小三郎』上田市立博物館 1994年
- ・『赤松小三郎 松平忠厚』上田市立博物館 2000年
- ・『赤松小三郎先生』柴崎信一著 信濃教育会 1939年（復刻版・現代語訳版あり）
- ・『赤松小三郎ともう一つの明治維新』関良基著 作品社 2016年
- ・『飯島保作と花月文庫』八十二文化財団編 1995年
- ・『花月文庫分類目録』上田市立図書館 2003年
- ・『石井鶴三全集』全12巻 石井鶴三著 形象社 1986～1988年
- ・『馬に夢をのせて』石井鶴三の生涯 小県上田教育会編 2001年
- ・『信濃路の俳人たち』藤岡筑邨著 信濃毎日新聞社 1975年

- ・『郷土の俳諧』上田市立博物館 1980 年
- ・『松家家集』伊藤松宇著 友田泰信堂 1926 年
- ・『信濃国小県郡年表』上野尚志著 上小郷土研究会 1949 年（復刻版あり）
- ・『小河滋次郎博士小伝』長野県方面委員連盟編 1940 年
- ・『笠原善吉翁の憶い出』笠原正巳著 1969 年
- ・『金井正選集』大槻宏樹編 早稲田大学教育学部 1983 年
- ・『山越脩蔵選集』大槻宏樹編 前野書店 2002 年
- ・『長野県初期社会主義運動史』松本衛二著 弘隆社 1987 年
- ・『戦後の上田女性史』小崎軍司著 上田市婦人団体連絡協議会 1973 年
- ・『金子行徳翁追想録』山浦国久編 1965 年
- ・『蚕都信州上田の近代』阿部勇ほか編 岩田書店 2011 年
- ・『山本鼎・倉田白羊』小崎軍司著 上田小県資料刊行会 1967 年
- ・『仏像のみかた』倉田文作著 第一法規 1966 年
- ・『八十二銀行史』八十二銀行編 1968 年
- ・『諏訪倉庫百年史』諏訪倉庫編 2010 年
- ・『佐久の近代を築いた人びと』中村勝実著 株式会社櫻 1995 年
- ・『信州の教師像』信濃毎日新聞社編 1970 年
- ・『教育功労者列伝』信濃教育会編 1935 年
- ・『小島大治郎翁』柳沢健太郎編 小島大治郎翁遺徳顕彰会 1957 年
- ・『上田丸子電鉄小誌』荻原成人編 上田丸子電鉄 1953 年
- ・『小菅武夫君』信濃教育会小県上田部会編 1930 年（復刻版あり）
- ・『小山真夫』武石村郷土誌研究会編 1977 年
- ・『来し方の記』9 柴崎高陽著 信濃毎日新聞社 1984 年
- ・『上田ノ写真ノ歴史』上田市立博物館 1979 年
- ・『暁雲』下村亀三郎伝 下村亀三郎伝記刊行会編 1980 年
- ・『来し方の記』5 真保正子著 信濃毎日新聞社 1983 年
- ・『上田染谷丘高校百年誌』上田染谷丘高校百年誌編集委員会編 2001 年
- ・『農民美術』長野県農民美術連合会編 1999 年

- ・『ハリー・K・シゲタその人生と写真展』上田市教育委員会編 2003 年
 - ・『和顔愛語を生きる』半田孝淳著 信濃毎日新聞社 2014 年
 - ・『黄金のくさび』飯沼信子著 郷土出版社 1996 年
 - ・『松山原造翁評伝』岸田義邦著 1985 年
 - ・『信州人物風土記・近代を拓く』20 松山原造 宮坂勝彦著 1989 年
 - ・『三吉米熊先生』長野県小県蚕業学校同窓会編 明文堂 1930 年
 - ・『郷土の人物 山極勝三郎博士』上田市立博物館 1980 年
 - ・『世界初の人工発癌に成功した山極勝三郎』小高健著 学会出版センター 2006 年
 - ・『山極勝三郎博士の生涯と業績』上田市立博物館 2007 年
 - ・『まぼろしのノーベル賞』神田愛子著 国土社 2012 年
 - ・『山本鼎』小崎軍司著 山本鼎記念館友の会 1969 年
 - ・『山本鼎物語』神田愛子著 信濃毎日新聞社 2009 年
- ※文学・美術関係の作品集・展覧会図録等は省略しました。

【謝辞・情報提供のお願い】

この冊子の作成にあたり、多くの個人・団体の皆様より執筆・写真提供をいただきました。厚く御礼を申し上げます。

また、掲載する人物についての情報提供を広報うえだ及び市ホームページでお願いしたところ、多くの市民の皆様から写真や作品の所蔵などについて貴重な情報を寄せいただきました。

この冊子は、先人・偉人の生涯や業績を簡便に紹介することを目的としているため、お寄せいただいた情報をただちに反映させることはできませんでしたが、今後の顕彰活動に生かしてまいります。

上田市教育委員会では、郷土の歴史や文化を継承するとともに、先人・偉人を顕彰する取り組みを進めています。そのために郷土の歴史や人物に関連する資料や情報を収集しています。

本書に掲載した人物はもとより、その他の郷土の先人について、写真・手紙・資料等をお持ちの方は、情報を教育委員会までお寄せください。

「ふるさと上田人物伝」編集執筆委員会

編集執筆委員

小平千文 阿部 勇

児玉卓文 滝澤正幸

事務局

上田市マルチメディア情報センター

上田市立博物館

丸子地域教育事務所

真田地域教育事務所

武石地域教育事務所

文化振興課

上田市合併 10 周年記念事業

ふるさと上田人物伝

発 行 平成 29 年(2017)3 月 31 日

編集・発行 上田市教育委員会（文化振興課）

〒386-0025

上田市天神 1-8-1 上田駅前ビルパレオ 5 階

TEL. 0268 (23) 6362

印 刷 中澤印刷株式会社

※本書に掲載した文章や写真の無断転載・複写を禁じます

